駒形遺跡

――平成26年度　保存目的の埋蔵文化財発掘調査報告書――

2016.3

茅野市教育委員会

駒形遺跡

――平成26年度　保存目的の埋蔵文化財発掘調査報告書――

2016.3

茅野市教育委員会

序　　文

茅野市は長野県南東部に位置する風光明媚な高原都市です。東に八ヶ岳連峰、西に赤石山脈から続く山脚、北に霧ヶ峰山塊を擁し、霧ヶ峰の南麓からは遠く富士山を望むことができます。

茅野市には特別史跡尖石遺跡、史跡上之段遺跡や駒形遺跡をはじめとする多くの縄文時代の遺跡があるだけでなく、「縄文のビーナス」や「仮面の女神」の愛称で親しまれている国宝に指定されている土偶を保有しています。こうしたことから、「縄文の里」として全国にその名を知られています。

今回報告する駒形遺跡は、昔から黒曜石製の石鏃が拾える遺跡として知られていましたが、一時、ほ場整備事業の事業地に計画されるという危機に直面しました。しかし、地権者の皆さんや関係者のご理解とご協力により開発を免れ、平成10年に国の史跡として指定された経緯があります。

史跡に指定されているのは、駒形遺跡の一部ですが、その後も周辺では開発が相次ぎ、それに伴う発掘調査も数多く行われてきました。そのような中、平成23年と24年には史跡隣接地を調査し、遺跡の重要部分がさらに広がっている可能性が出てきたため、史跡の追加指定を受けることができました。

茅野市では、この駒形遺跡を後世まで保存し活用をしていくため、史跡整備のための保存活用計画の策定を目指しています。そのためには、あまり調査が行われたことのない史跡指定地内の調査が不可欠ということになり、今回の試掘調査の運びとなりました。

調査では、集落の中央に設けられた広場の規模を探る調査であったため、何軒もの住居が発掘され、大量の遺物が出土するというものではありませんでしたが、当初の目的を十分に達成することができました。本報告書が多くの皆さまに活用されることを期待しております。

最後になりましたが、発掘調査にご指導を賜りました文化庁ならびに長野県教育委員会の皆さま、調査に従事された作業員の皆さまに心からお礼を申し上げます。

平成28年3月

茅野市教育委員会
教育長　牛山英彦

例　言

1　本書は、長野県茅野市が平成 26 年度に国宝重要文化財等保存整備補助金を受けて実施した、国史跡駒形遺跡の保存目的の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　本書は平成 27 年度国宝重要文化財等保存整備補助金を受けて作成した。
3　事業は以下の期間に実施した。
　試掘調査　平成 26 年 11 月 6 日～平成 26 年 12 月 26 日
　整理作業および報告書作成　平成 27 年 1 月 5 日～平成 28 年 3 月 24 日
4　試掘調査は鵜飼幸雄・塩澤恭輔が担当した。
5　発掘調査の土層観察については、小山正忠・竹原秀雄 1995『新版標準土色帖』による。
6　発掘調査にあたり、以下の委託業務を実施した。
　基準杭設置測量業務委託：株式会社両角測量
7　遺物等の整理作業は酒井みさを・大勝弘子・武居八千代・立岩貴江子が行い、遺物実測は鵜飼幸雄・酒井みさを、トレースは鵜飼、写真撮影は小海清明が行った。
8　本書の執筆分担は以下のとおりである。
　　鵜飼幸雄　第 3 章第 2 節 1・4・5・6・7、第 3 節、第 4 章
　　小林深志　第 1 章第 4 節、第 2 章第 1 節・第 2 節
　　塩澤恭輔　第 2 章第 3 節、第 3 章第 1 節・第 2 節 2・3
　　山科　哲　第 1 章第 1 節・第 2 節・第 3 節、第 3 章第 4 節
9　調査から報告書作成に至る過程で以下の方々にご指導・ご協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である（順不同・敬称略）。
　文化庁文化財部記念物課史跡部門主任文化財調査官　佐藤正知
　文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門文化財調査官　水ノ江和同
　長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事　櫻井秀雄
10 本書に関する出土品及び諸記録は茅野市教育委員会文化財課が管理し、茅野市尖石縄文考古館で保管している。

目　次

例言
目次
第１章　駒形遺跡の位置と環境
　第１節　遺跡の位置と地理的環境……1
　第２節　微地形からみた桧沢川扇状地の形成履歴と駒形遺跡……3
　第３節　歴史的環境　特に黒曜石原産地と駒形遺跡……3
　第４節　これまでの調査の概要……9
第２章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯……11
　第２節　調査の組織……11
　第３節　調査の経過……12
　　１　調査の目的……12
　　２　調査の方法……12
　　３　発掘調査の経過……12
　　４　成果の公開と普及……14
第３章　発掘された遺構と遺物
　第１節　遺跡の層序とトレンチの状況……17
　第２節　遺構と出土遺物……17
　　１　住居址……17
　　２　土坑……23
　　３　屋外埋甕……25
　　４　配石遺構……25
　　５　焼土址……25
　　６　黒曜石集積遺構……27
　　７　その他の遺構……27
　第３節　遺構外の出土遺物……32
　第４節　黒曜石サンプルと黒曜石石器について……33
第４章　調査のまとめ……40
写真図版

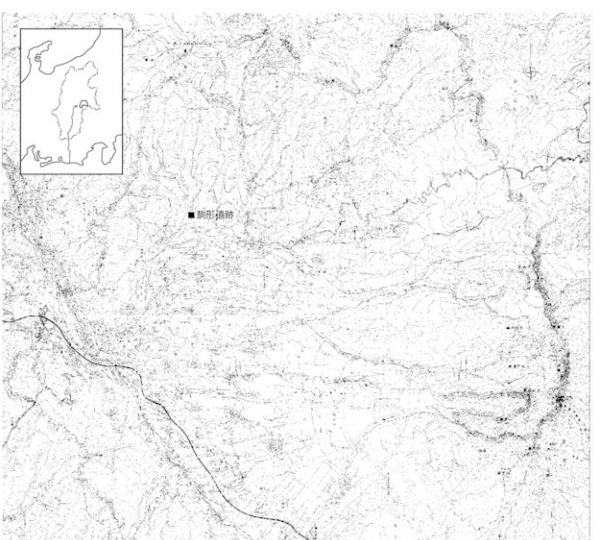
第１章　駒形遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

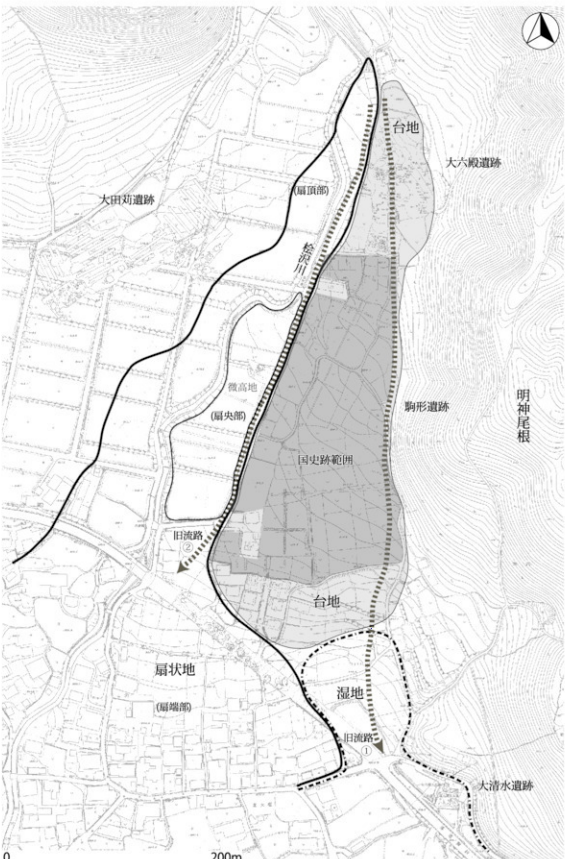
駒形遺跡は長野県茅野市米沢北大塩にある（第１図）。遺跡の北側には霧ヶ峰の山体があり、南側には上川が流れ、遺跡は霧ヶ峰の踊場湿原から発する桧沢川が上川へ向かって流れるなかで形成された扇状地上に立地する。扇状地は緩やかな傾斜面をなしており、標高およそ 900m ～ 930m の間に駒形遺跡が広がっている。扇状地の遺跡北側に広がる霧ヶ峰は黒曜石の原産地として知られる。

霧ヶ峰に発する河川によって形成された扇状地は、東の朝倉山の山体から西の永明寺山山体までのあいだに、藤原川・前島川によるもの、桧沢川によるもの、横河川によるものがあり、いずれも南向きの緩やかな斜面で、縄文時代の集落遺跡が立地する。この範囲を霧ヶ峰南麓と呼んでいる。南を流れる上川の右岸にあたるが、この上川の左岸を八ヶ岳山麓として区別している。

桧沢川によって形成された扇状地は、南北およそ 650m、東西およそ 350m の細長い三角形状で、北側の緩やかな傾斜を持った台地状の地形と、南側の扇状地末端に相当するであろう平坦部に分れる。駒形遺跡に確認できる人類活動の痕跡は、こうした微地形的な違いがありながら、台地状の地形にも扇状地末端部の平坦な地形にも認められる。



第１図　駒形遺跡の位置



第２図　駒形遺跡周辺の小地形区分

この扇状地は、茅野市域の地形面形成において「上川・柳川・宮川沿いに発達する地形面で、河床からの比高は数m前後で、厚さ２m前後の礫層をのせている浸食段丘」で「この面上にはテフラ層をのせていない」第Ⅳ段丘面とされていたが（茅野市 1986）、既報告でも述べたとおり、台地状の地形においては風成堆積テフラによると思われるローム層が確認できており、加えて扇状地においては台地状の地形が供給源であろうと思われる二次堆積ローム層があることから、この扇状地の大部分は、同じ上川・柳川・宮川沿いに発達し、御嶽火山、乗鞍火山、八ヶ岳火山起源のテフラの風成堆積を含む第Ⅱ段丘を浸食して形成された第Ⅲ段丘面であろうと判断される（茅野市教育委員会　2013）。

この扇状地の微地形的な形成過程については、過去の報告で、ローム層及び上位の堆積土層中に礫が含まれないところを「台地」、含まれるところを「扇状地」、またローム層に達するまでに水が湧いてくるところを「湿地」というように、地形要素の区分を定義したうえで詳しく推論しているが、簡単に振り返っておきたい。

第２節　微地形からみた桧沢川扇状地の形成履歴と駒形遺跡

これまでの調査で、駒形遺跡の南東には現在でも豊富な湧水である大清水があり、駒形遺跡の史跡指定範囲とこの大清水のあいだに「湿地」のエリアがある（茅野市教育委員会　前掲）。桧沢川の流れ出しが変わっていないとすれば、本来はこの「湿地」に向かって流れていたと想定でき（第２図の旧流路①）、その後徐々に流れ出た土砂によって流路が西側へと変わっていって、「台地」の基盤が形成された。第４次調査Ｅトレンチ東側に確認できた谷状地形によってこうした可能性を想定できる（長野県教育委員会　1997）。

流れ出し口からより南西側に流路を曲げた桧沢川は蛇行しながら「扇状地」を形成していった。「台地」との比高差は扇央部で約５m、扇端部で約 10 mとなっている。なお、第８次調査と第 12 次調査で土石流とみられる堆積物を確認している（茅野市教育委員会　前掲）。土石流と思われる堆積物（「第２層群」）からは早期前半から後期前半にかけての土器が含まれており、後期前半以降に生じた可能性が指摘されている。

ところで、後期前半の敷石住居や鉢被せ土壙墓の存在が確かめられた第５次調査区の土層の所見では、地山直上のVd層やVf層に2㎜～30㎝程度の礫を多く含むとの所見がある。この調査区は、「扇状地」の中央にあたるから、礫を含むVd層やVf層も土石流由来の可能性はある。敷石住居や鉢被せ土壙墓はその上位で構築されているので、駒形遺跡の履歴には「居住または何らかの活動→土石流→施設移築（または移住→戻ってきての施設構築）」といった土地利用が想定できる。そのような土石流の影響を受けての土地利用のあり方が、土器編年による時期の違いというような長期的な時間幅で起きたことなのか、もっと短い時間幅で起きたことなのかは判断できない。なお、後期における駒形遺跡と大六殿遺跡の遺跡立地には低地化傾向があるので、こうした傾向も含めて、今後時期ごとの各種施設の構築について土石流の影響があったかどうか、検討していきたいところである。

第３節　歴史的環境　特に黒曜石原産地と駒形遺跡

駒形遺跡のすぐ北には大六殿遺跡があり、また桧沢川を挟んで大田苅（だいたがり）遺跡がある。大六殿遺跡との間には、地形的に区切るべき要素はなく、本質的には一つの遺跡として考えてよいであろう（茅野市教育委員会　前掲）。

先に紹介したように、霧ヶ峰南麓の扇状地は南向きで緩やかな傾斜のためか、多くの縄文時代遺跡の存在が確認されている（第４図）。国宝「土偶」（縄文のビーナス）が出土した棚畑遺跡をはじめ、高風呂遺跡、一ノ瀬・芝ノ木遺跡、上の平遺跡などがあげられるが、上川を挟んで対岸に広がる八ヶ岳西南麓の遺跡に比較すると、霧ヶ峰南麓の縄文時代遺跡は断続的に長期にわたって利用された痕跡が確認できる点に特徴がある。この駒形遺跡も早期前半から晩期までの資料が出土している。棚畑遺跡、八幡坂遺跡、一ノ瀬遺跡、よせの台遺跡、大桜遺跡なども同様に早期～後期または晩期の資料が出土している。もちろん、時期によっては遺構が確認できず、具体的な人類活動を議論できないが、中期に集中する傾向がある八ヶ岳山麓とは異なる特徴と言える。

こうした背景には、黒曜石原産地との密接な関係が要因の一つとして考えられる。これらの遺跡群の背後（北

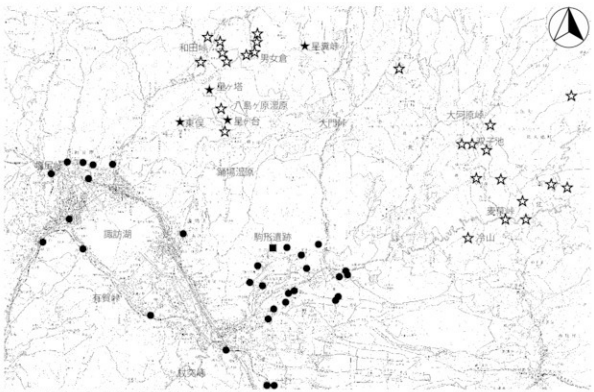
側）にそびえる霧ヶ峰は本州最大の黒曜石原産地と言われ、地下に存在する黒曜石を採掘している痕跡が見つかった文字通りの原産地である星ヶ塔、東俣、星ヶ台をはじめ、沢筋でも入手できる観音沢、ウツギ沢など、黒曜石を入手できるポイントが近接して散在している（下諏訪町教育委員会　2001・2008）。

霧ヶ峰南麓の扇状地からは、標高 940m 付近で急傾斜となり、歩いて登るには一苦労であるが、沢筋を伝っていけば黒曜石原産地付近へ 10km 程度で到達する。駒形遺跡からは遺跡の東側に張り出している明神尾根を利用して尾根伝いに目指した方が到達しやすいようであるが、いずれにしても 1 日 2 日程度で黒曜石を入手できる環境にあったと言える。

実際、第 6 次調査にあたる県道諏訪茅野線建設に伴う調査で、主に前期前半の集落の一部が調査され、大量の黒曜石製石器が出土した（長野県埋蔵文化財センター　2007）。蛍光 X 線による産地推定分析では、星ヶ台や星ヶ塔、東俣原産地で入手できる黒曜石が判別される「諏訪星ヶ台群」が突出した構成比になった（望月　2007）。距離的には至近にあるこれらの黒曜石原産地から豊富な黒曜石を入手し、それらを利用した大規模な石器製作がおこなわれていたことが確かめられたと言えるだろう。

加えて、ここ 20 年来の黒曜石の産地推定分析結果から、関東地方をはじめとする本州中央部の縄文時代における信州産黒曜石の利用は星ヶ塔や星ヶ台や東俣と呼ぶ原産地で採取できる黒曜石が圧倒的に多いことがわかってきた。時期的な流通のあり方に違いを指摘する研究もあるが（大工原　2007）、広域に機能していたであろうネットワークを通じてもたらされていたと思われる。

その起点となったと思われるのがこれら霧ヶ峰南麓の遺跡である。高風呂遺跡、上の平遺跡、一ノ瀬・芝ノ木遺跡、駒形遺跡、大桜遺跡、棚畑遺跡で黒曜石原石の集積遺構が複数見つかっている。中には一つの住居内に複数の集積遺構を持つ例もある（棚畑遺跡第 108 号住居址、一ノ瀬・芝ノ木遺跡第 58 号住居址）。岡谷市長地でも同様に清水田遺跡、梨久保遺跡、上向遺跡、榎垣外（えのきがいと）遺跡、大洞 A 遺跡などで、また下諏訪町一ノ釜遺跡でも土坑内集積例が見つかっている（第 3 図）。



第 3 図　駒形遺跡と黒曜石原産地

14：上の棚　15：キツネ原　16：矢の口　17：上ノ段　18：高風呂　19：窪田　20：枡形　21：上の平　22：湯川経塚
23：イモリ沢　24：上ゲ清　25：横山　26：上の平　27：丸山　28：よせの台　29：芝ノ木　30：一ノ瀬　31：鳥の久保
32：大六殿上　33：大六殿　34：駒形　35：大清水　36：上の山　37：向林　38：三軒屋　39：大桜　40：八幡坂　41：中の平　42：丸山　43：乾石　44：櫛畑　49：尾根　50：長峯　51：聖石　52：滝ノ脇　53：神ノ木　54：上ッ原　55：下ッ原　56：下島　57：松原　58：山口　59：新井下　60：中ッ原　61：花蒔　62：辻屋　63：中村　64：下曽沢　65：高尾戸　66：上半田　67：子の神　68：中原　69：宮の上　70：八幡社前　71：山寺　72：経塚　73：権現林　74：日向上　75：塩之目尻　76：中ツルネ　77：梨ノ木　78：師岡平　79：向原　80：立石　81：城　82：水尻　83：中ッ原Ａ　84：神立林　85：与助尾根　86：与助尾根南　87：尖石　88：竜神平　89：新水掛Ａ　90：鴨田　91：稗田頭Ａ　92：中原　93：細沢　94：棚畑　145：長峰　150：川久保古墳　151：下河原　152：石小屋１号古墳　153：京塚原　154：下ノ原　155：中御前　156：上の原　157：和田日向　158：茅野和田　159：久保川　160：小堂見　161：上御前　162：藤塚　163：一本木　164：尾根田　165：中沢　166：上の平　167：日鴨寺　168：上見　170：馬捨場　171：山之神　172：丸生戸　173：城山城跡　174：菖蒲沢Ⅲ　175：菖蒲沢Ⅱ　202：糸萱　203：朝倉山城跡　204：菖蒲沢Ａ　205：菖蒲沢Ｂ　206：竜神平下　207：新水掛Ｂ　208：金堀場　209：稗田頭Ｂ　210：威力不動尊東　211：古田城跡　212：尼御前　213：田部石　214：埴原田城跡　215：埴原田　216：李久保　217：鬼堀城跡　218：土佐屋敷　219：御座石神社　220：鈴松山城跡　228：要沢城跡　233：矢倉田　234：山之神沢　235：北山菖蒲沢Ａ　236：広井出　237：北山菖蒲沢Ｂ　238：珍部坂Ａ　239：簡原　240：珍部坂Ｂ　241：牛ノ尻　242：間久保　243：姫御前　244：植入　245：山田畑　246：中島　253：笹尾根　254：石塔坂　255：上ノ棚　256：中ヤツカ古墳　260：藤右衛門前　268：石小屋２号古墳　277：広畑　284：日向前　287：平十郎久保　288：小久保　289：越道上　290：塚　291：梵天原　299：ツキノ木　301：籔原前久保三角塚　302：中ッ原Ｂ　304：稗田頭Ｃ　309：菖蒲沢　310：大田刈　311：出ノ脇　312：貫地　313：久保御堂　315：中尾　320：スナアラ古墳　326：式部沙　327：別田沢　328：町道下　331：大久保　333：尖石南　339：南堰東　340：河原　347：林上

第４図　霧ヶ峰南麓・蓼科山麓・八ヶ岳西麓の遺跡（1/50,000）

第1表　霧ヶ峰南麓の遺跡と竪穴住居址数

遺跡番号	遺跡名	時代・時期																備考
		旧石器	縄文								弥生			古墳	奈良	平安	中世	
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	前期	中期	後期						
18	高風呂			3	31	15			5									1984年発掘調査(原因―県営は場整備事業)
26	上の平	●			1	45			6								●	1994年発掘調査(原因―県営は場整備事業)
27	丸山				●	●												
28	よせの台			●	4	9	●											
29・30	一ノ瀬・芝ノ木	●		2	18	53	9	2								14		1976年発掘調査(原因―工場建設)
31	鳥の窪				●	●											●	1994～1998年発掘調査(原因―県営は場整備事業)
32	大六殿上															●		
33	大六殿			1	3		4									2		1999年発掘調査(原因―県営は場整備事業)
34	狐形	●		●	62	22	3	●	11							1		2000年発掘調査(原因―県営は場整備事業)ほか
35	大清水					●												
36	上の山					●												
37	前林			10	1											2		1998年発掘調査(原因―県営は場整備事業)
38	三軒屋				●													
39	大塚			●	●	14	9		5				●			8		1999～2000年発掘調査(原因―県営は場整備事業)
40	八幡坂			●	4	11	1		6								●	1997～1998年発掘調査(原因―県営は場整備事業)
41	中ノ平					●	●											
42	丸山			●	2	1			1									1973年発掘調査(原因―会社更生施設建設)
43	蛇石							●										
44	櫛畑	●		●	3	146	●	●								9	●	1986年発掘調査(原因―末沢工業団地造成)
212	尼御前					●												
213	出部石					●												
214	城原出城跡																●	
215	城原田							●										
216	李久保							●										
241	牛ノ児							●										
242	間久保																	不明
243	笹御前																	不明
244	柱人																	不明
287	半十郎久保				1													
288	小久保							●								●		
309	高瀬沢							●										
310	大出苅				10	2	1									5		1999年発掘調査(原因―県営は場整備事業)
311	笛ノ窪							●										
312	貝地			5	●	1												1999年発掘調査(原因―県営は場整備事業)
	合計			21	140	319	27	2	34							39		

●は遺物の出土のみ
狐形遺跡の前期住居址は、早期・末葉～前期・初頭とされたものを含む

第２表　発掘された霧ヶ峰南麓の遺跡の概要①

遺跡番号 遺跡名 種別 標高(m)	調査面積 (㎡)	調査期間	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	関係文献
18 **高風呂** **たかぶろ** **集落址** **965**	2,000	1984.5.23～ 1984.8.10	縄文	住居址51 －早期3 －前期31 －中期12 －不明5 土坑42 方形柱穴列1 集石8 黒曜石集積4	早期・前期・中期 土器 石器 玦状耳飾 木製品	**・縄文時代早期末葉～前期初頭を中心とする集落址** **・この時期の尖底土器群は貴重な資料**	**『高風呂遺跡』** **茅野市教育委員会** **1986年**
26 上の平 うえのだいら 集落址 940	6,342	1994.5.24～ 1994.12.22	旧石器 縄文 中世	住居址52 －前期1 －中期45 －不明6 土坑269 黒曜石集積1 ピット群 地下式坑7基	彫器・剥片 中期後半土器 黒曜石製石器 打製石斧 白磁・天目茶碗	・旧石器時代の散布地 ・縄文時代中期の集落址	『上の平遺跡』 茅野市教育委員会 1995年
28 よせの台 よせのだい 集落址 920	460	1976.6.12～ 1976.7.19	縄文	住居址13 －前期4 －中期9小竪穴 小竪穴22	早期・前期・中期 後半・後期初頭土器 石器 玦状耳飾	**・縄文時代中期後半は隣接する芝ノ木・一ノ瀬遺跡の支村的な性格が考えられる**	『よせの台遺跡』 茅野市教育委員会 1978年
29・30 芝ノ木・一ノ瀬 しばのき・いちのせ 集落址 930	20,081	1996.6.4～ 1997.1.31 1997.4.21～ 1998.1.30	旧石器 縄文 平安 近世	住居址98 方形柱穴列22 石棺墓44 土坑773 住居址14 黒曜石集積2 掘立柱建物址1	槍先形尖頭器 ナイフ形石器 早期前半～晩期初頭土器片 土偶・土製耳飾 石鏃・スクレイパー 灰釉陶器坏 鉄製雁股鏃 染付碗片	・縄文時代早期前半～晩期初頭まで継続する拠点的な集落で、黒曜石製石器が多量に出土しており、黒曜石製石器の製作遺跡であったと考えられる。	『一ノ瀬・芝ノ木遺跡』 茅野市教育委員会 2001年
33 大六殿 だいろくでん 集落址 930	6,000	1999.9.9～ 1999.12.28	縄文 平安	住居址8 －早期前半1 －前期末葉3 －後期前葉4 竪穴状遺構3 配石1 土坑158 焼土址5 屋外炉1 住居址2	早期前半・前期前半・前期末葉・中期初頭・後期前葉 土器 石器 玦状耳飾 土師器・灰釉陶器・須恵器 硯石	駒形遺跡と連続する縄文時代と平安時代の集落址	『大六殿遺跡』 茅野市教育委員会 2002年
37 向林 むかいばやし 集落址 925	5,000	1998.6.15～ 1998.10.30	縄文 平安	住居址11 －早期10 －前期1 土坑60 住居址2	早期押型文土器片 スクレイパー・石鏃・特殊磨石 前期土器片 石鏃・磨石・打製石斧 須恵器坏・須恵器横瓶・土師器甕	・縄文時代早期、前期末葉の集落址 ・平安時代の集落址	『向林遺跡』 茅野市教育委員会 1999年

第３表　発掘された霧ヶ峰南麓の遺跡の概要②

遺跡番号 遺跡名 種別 標高(m)	調査面積 (㎡)	調査期間	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	関係文献
39 大桜 おおざくら 集落址 892	1,900	2000.7.23～ 2001.1.13 2001.6.26～ 2001.9.6	縄文 平安	住居址28 土坑2228 埋設土器9 焼土址6 列石、配石 黒曜石集積1 住居址6 焼土1	中期後半～後期中葉土器 翡翠製垂飾 曽長石製垂飾 琥珀製垂飾 土偶 土師器甕・坏 須恵器甕・坏 鉄製紡錘車	・縄文時代中期から後期中葉の拠点的な集落址	『大桜遺跡』 茅野市教育委員会 2001年
40 八幡坂 はちまんざか 集落址 892	3,500	1997.7.7～ 1998.1.14	縄文 中世	住居址22 土坑236 掘立柱建物址 方形竪穴16 土坑55 地下式坑13	縄文土器 石器 内耳土器 灰釉陶器 石臼 小金銅仏	・縄文時代前期末葉から後期前葉の集落址 ・霧ヶ峰南麓で稀な中世の複合遺跡	『八幡坂遺跡』 茅野市教育委員会 1998年
42 丸山 まるやま 集落址 893	3,000	1973.11.16 ～ 1973.12.11	縄文	住居址3 －前期2 －中期１ 住居址(時期不明) 1 小竪穴１０	前期・中期土器 石器	**・上川沖積地の中の丘陵上にある小規模な集落址** **・前期末葉、下島式の完形に近い土器は優品**	『丸山遺跡』 茅野市教育委員会 1974年
44 種畑 たなばたけ 集落址 881	9,000	1986.4.9～ 1986.11.1	旧石器 縄文 平安 中世・近世	住居址149 －前期3 －中期146 竪穴状遺構2 方形柱穴列14 土坑643 ピット群 集石遺構7 敷石遺構1 黒曜石集積5 住居址9 掘立柱建物址3 土坑1 掘立柱建物址3 柱穴列1 土坑8	尖頭器・剥片 縄文土器・石器 土製品 土偶 (国宝「土偶」1) 平安土器 土製品・鉄製品 石製品 銭貨	・縄文中期の集落を主とする遺跡 ・中期の集落市は住居址が環状に配列する ・環状集落の中央広場より国宝「土偶」(縄文のビーナス)が出土	『種畑遺跡』 茅野市教育委員会 1990年
310 大田苅 だいたがり 集落址 929	5,200	1999.6.22～ 1999.10.15	縄文 平安	住居址13 －前期10 －中期2 －後期1 土坑182基 住居址5	有茎尖頭器 土器・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙・玦状耳飾 土師器坏・甕 須恵器坏・瓶 灰釉陶器碗	・縄文時代前期末葉を主体とする集落址 ・平安時代の集落址	『大田苅遺跡』 茅野市教育委員会 2001年
312 買地 かいち 集落址 897	939	1999.5.20～ 1999.6.30	縄文	住居址6 －早期5 －中期1 土坑5	早期末土器片 スクレイパー・石鏃剥片・砕片 中期中葉・後半土器片	・縄文時代早期末葉の集落址	『買地遺跡』 茅野市教育委員会 2000年

駒形遺跡は、黒曜石集積だけでなく、それらの遺跡のなかでも多量の石鏃が採集されている遺跡であり、やはり黒曜石の供給に大きな役割を果たした遺跡のひとつであったと考えられる。

第4節　これまでの調査の概要

駒形遺跡は、黒曜石製の石器、特に石鏃が多数拾える遺跡として有名で、田実文朗氏の収集を始め、地元の子供たちの収集を兼ねた遊び場としても知られていた。

本格的な発掘調査が行われたのは、昭和36年、41年に諏訪実業高校地歴部が尖石考古館の宮坂英弋・虎次両氏の指導のもとに行われた調査で(宮坂　1961、1966)、以後、ほ場整備事業が計画されるまで地権者の皆さんが耕作を行うだけで、大きな地形の改変はなかった。

しかし、駒形遺跡を含む米沢地区一帯で、ほ場整備事業が計画され、長野県教育委員会によるトレンチ調査が行われ(長野県教育委員会　1997)、重要部分についての保存、史跡指定が行われる一方、隣接地でのほ場整備事業に伴う発掘調査(茅野市教育委員会　2002)、県道諏訪一茅野線の建設に伴う大きな発掘調査(長野県埋蔵文化財センター　2007)のほか、住宅建設や下水道管敷設など十数次にわたって調査が行われてきた。これらの調査とその成果については、すでに報告がなされている。

駒形遺跡が平成10年に国史跡に指定されて以後、開発はもっぱら史跡指定地より一段下がった上川の河岸段丘を中心に行われてきた。しかし、平成22年3月には、史跡に隣接する南西隅の台地上に住宅建設が行われることとなり、発掘調査が行われた(茅野市教育委員会　2011)。周辺は台地上に営まれた縄文集落の外縁部とみられ、濃密な遺構(竪穴住居址)の埋蔵は予想されなかったが、調査を進めたところ、前期前半(初頭～前葉)、中期前半(中葉)、中期後半などの8軒もの竪穴住居址が切り合った状態で確認された。事業者の遺跡に対する理解と協力によって、これらの遺構は住宅の基礎下に保存されることとなったが、事業地に隣接する西側および南側の民有地に縄文集落の広がる可能性が濃厚となった。

周辺の民有地は畑に使われているが、特に史跡の西側および南側の民有地は住宅に囲まれていることから、今後宅地化する可能性が十分に考えられた。そのため、文化庁から早急に地下の様子を確認し、状態に応じた適切な措置をとることが求められた。

また、遺跡範囲の北端かつ史跡範囲の北側には民有地が広がっている。平成6年の県教育委員会による確認調査(4次調査)でも、この民有地にかかるように中期前半(中葉)の複数の竪穴住居址が確認されている。また駒形遺跡の北に接する大六殿遺跡の発掘調査(茅野市教育委員会　2002)によって、民有地に近い地点から前期後半(末葉)の竪穴住居址が発見されている。こうした遺構の分布状況から、両遺跡に挟まれた民有地に前期後半および中期前半の竪穴住居址の埋蔵が指摘されていた。

こうした状況を受け、平成23年度は史跡の西側隣接地、平成24年度は史跡の北側近接地を対象に確認調査を行うこととした(茅野市教育委員会　2013.3)。

史跡の西側隣接地の調査では、縄文時代の住居址5軒のほか、平安時代の住居址1軒も検出した。また、遺物には縄文早期後半や前期前半のものもみられ、縄文時代の長きにわたって継続して営まれた遺跡であることが再確認された。

史跡の北側は、駒形遺跡の範囲でありながら史跡指定から漏れ、また、北に隣接する大六殿遺跡などのほ場整備事業に伴う発掘調査の対象からも外れており、史跡から継続する地形をよく残していた。遺構には、予測された縄文中期の住居址のほか、削平されているのではないかと思われた西側の桧沢川に傾斜する斜面で、縄文後期の住居址が検出される成果を上げることができた。

台地下の扇状地では、平成25年度に個人住宅の建設に伴う発掘調査を行い、縄文時代の住居址2軒を検出している。また、遺物には、台地下で検出したことのなかった縄文前期後半の土器も出土し、新たな縄文前期後半の集落の存在を予測させる発見となった(茅野市教育委員会　2015)。

第４表　平成３年以降の駒形遺跡発掘調査等

調査年次	小地形	調査原因	調査機関	調査期間	調査面積	主な遺構	主な遺物
3次	台地	宅地造成	市教委	1991.9.12	288 ㎡	土坑1	縄文前期前半（初頭～前葉）土器 石器 黒曜石
4次	台地・湿地	試掘調査	県教委	1994.7.4～ 1994.7.13 1994.11.24～ 1994.12.1 1996.7.3～ 1996.7.5	553 ㎡	縄文早期後半（末葉）～前期前半（初頭）、前期前半（初頭～前葉）、中期前半（中葉）・後半住居址、時期不明住居址27（6住～33住） 縄文後期前半（前葉）配石1 土坑多数	縄文早期後半（末葉）～前期前半（初頭）、前期前半（前葉）、中期前半（中葉）・後半、後期前半（初頭～中葉）土器 石器 黒曜石
5次	扇状地（微高地）	農業基盤整備	市教委	2000.3.1～ 2000.7.24	600 ㎡	縄文後期前半（前葉～中葉）、時期不明住居址3（34住～36住） 土坑（墓址）多数 埋設土器2 配石3 土器集中1 黒曜石集中1 焼土址1	縄文後期前半（前葉～中葉）土器 石器 黒曜石
6次	扇状地・湿地	県道	県埋文センター	2004.4.20～ 2004.12.22 2005.8.22～ 2005.12.2	3,300 ㎡	縄文前期前半（初頭～前葉）住居址37（37住～73住） 掘立柱建物跡2 方形柱穴列8 土坑43 屋外炉20 黒曜石集積1 配石1	縄文前期前半（初頭～前葉）土器 石器 黒曜石（石鏃製作工程に関する資料）
7次	扇状地	個人住宅倉庫	市教委	2005.4.6 2005.5.23～ 2005.5.24	189 ㎡	縄文前期前半（初頭～前葉）住居址4（74住～77住） 土坑4	縄文前期前半（初頭～前葉）土器 黒曜石
8次	扇状地（微高地～谷）	水道	市教委	2006.6.5～ 2006.8.24	470 ㎡	土坑46	縄文早期後半（末葉）、前期前半、前期後半（末葉）、中期前半（中葉）・後半、後期前半（初頭～中葉）土器 石器 黒曜石
9次	台地・扇状地	下水道	市教委	2006.9.26～ 2006.11.30	140 ㎡	縄文前期前半（初頭～前葉）住居址7（78住～84住） 土坑6	縄文前期前半（初頭～前葉）土器 石器 黒曜石
10次	台地	個人住宅	市教委	2010.3.12～ 2010.4.13	87 ㎡	縄文前期前半（初頭～前葉）、中期前半（中葉）～中期後半、時期不明住居址8（85住～92住） 土坑多数	縄文早期後半（末葉）、前期前半（初頭～前葉）、中期前半（中葉）・後半土器 土偶 石器 黒曜石
11次	扇状地	個人住宅	市教委	2011.6.8	41 ㎡	なし	なし
12次	**台地**	確認調査	市教委	2011.11.18～ 2012.1.4	136 ㎡	縄文早期後半（末葉）～前期前半（初頭）、前期前半（初頭～前葉）、縄文住居址5(93住～95住、97・98住)、平安住居址1（96住） 土坑多数	縄文早期後半（末葉）～前期前半（初頭）、前期前半（初頭～前葉）、中期後半、後期前半（前葉～中葉）土器 石器 黒曜石
13次	台地～扇状地	確認調査	市教委	2012.7.2～ 2012.12.14	347 ㎡	縄文中期前半（中葉）、後期前半（前葉）住居址4（99住～102住） 土坑6	縄文中期前半（中葉）、後期前半（前葉）土器 土偶？ 石器 黒曜石
14次	扇状地	個人住宅	市教委	2013.4.22～ 2013.5.21	73 ㎡	縄文住居址2(103住、104住) 土坑多数	縄文土器(前期～中期) 石器
15次	台地	確認調査	市教委	2014.11.6～ 2014.12.26	108 ㎡	縄文前期前半住居址1(107住) 縄文前期後半住居址1(106住) 縄文中期後半住居址1(105住) 土坑6、焼土址8、屋外埋設1、配石遺構1	縄文早期末～前期、中期、後期前半土器 石器、石棒、多孔石、黒曜石
					6,332 ㎡		

第２章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

平成 22 年３月から４月にかけ、駒形遺跡の史跡指定地の西側隣接地に個人住宅が建築されることとなり、建物範囲を総掘りする基礎工事が計画され、これに伴い発掘調査が行われた（第 10 次調査　茅野市教育委員会　2011.3）。その結果、保存状態の極めてよい遺物包含層の下から、前期前半（初頭～前葉）、中期前半（中葉）、中期後半と時期の不明な８軒の竪穴住居址が、多数の土坑とともに切り合いながら検出された。ここで検出された遺構は、文化庁および県教育委員会の指導のもと、地権者の理解と協力もあって、建物の基礎下に保存された。

この調査の結果から、史跡範囲の外側（台地上）に縄文集落が広がることがほぼ確実となった。これを受けて、駒形遺跡の台地上の集落の分布の広がりを確認するため、平成 23 年度にこの住宅に隣接する史跡範囲西側の畑地について、地権者の了解のもと第 12 次の調査を行った。試掘調査の結果、史跡範囲の南西側に、縄文時代の集落が続いていることが確認された（茅野市教育委員会　2013.3）。

また、翌年の平成 24 年度には、史跡範囲と北側に近接する大六殿遺跡に挟まれた地点について、遺跡の範囲を確認するため、地権者の了解のもと第 13 次調査を行った。この試掘調査でも、縄文時代中期中葉の住居址が確認され、駒形遺跡から、大六殿遺跡に続く縄文時代の集落の一部であることが確認された。この調査では、調査区の中で一段低くなっている西側で、縄文時代後期前半の住居址も確認されるなど、駒形遺跡の保存と活用を考える上で重要な個所であることが認識された（茅野市教育委員会　2013.3）。

このため、試掘調査を行わせていただいた地権者を中心に、史跡の追加指定についての協議を行い、９名の方から計 10 筆について同意が得られ、3,506.90㎡について意見具申を行い、平成 26 年 10 月６日付で国史跡に追加指定が行われた。また、翌年の平成 27 年にも地権者の同意が得られた１筆 304.00㎡が 10 月７日付で追加指定されている。

このように、茅野市では史跡駒形遺跡の整備について準備を進めてきたところであるが、保存活用計画を策定するにあたり、新しく追加指定を受けた個所も含めた史跡指定地の南側にあると推測される縄文時代中期後半の集落について、文化庁より規模や構造について調査を行う必要があるのではないかとの指摘を受けた。

そこで、長野県教育委員会が調査し、住居址を検出している東側と、住宅建設に伴い市教育委員会が調査し、住居址を検出している間の広場と考えられる地点に東西 38 m、南北 74 mのトレンチを設定し、環状集落の規模と、中央広場の性格を探る試掘調査を行うこととした。

第２節　調査の組織

発掘調査は茅野市教育委員会事務局生涯学習部文化財課および尖石縄文考古館が実施した。

① 調査主体者　牛山英彦（教育長）
② 事務局　木川亮一（生涯学習部長）
③ 文化財課・尖石縄文考古館
　　守矢昌文（文化財課長・尖石縄文考古館長）
　　小林深志（文化財係長）　小池岳史（考古館係長）
　　塩澤恭輔　鵜飼幸雄（文化財係）
　　山科　哲　大月三千代（考古館係）
④ 調査担当　鵜飼幸雄・塩澤恭輔（発掘調査・整理作業・報告書担当）
　　小林深志・山科　哲（報告書担当）
⑤ 発掘調査・整理作業参加者
　　補助員　武居八千代　立岩貴江子　酒井みさを　大勝弘子
　　作業員　宮坂功　柳沢省一　赤羽千雲　後藤信一　北澤俊弘　山田善興

第３節　調査の経過

1　調査の目的

これまでの調査から駒形遺跡は「縄文時代中期を中心に黒曜石の供給拠点としての役割を果たした大規模集落」という評価から国史跡の指定を受けている。しかし、これまでに行われた史跡内の調査は史跡指定前の４回の試掘調査のみで、遺跡が残されていることは確認されていたが、明確な集落像が捉えられておらず、史跡外の調査や市内の縄文時代の大規模な遺跡を参考に、環状あるいは馬蹄形集落が想定されていた。

遺跡として大切に保護・保存していく上で、今後の駒形遺跡保存活用史跡整備を進めるため、遺跡の中核でもある縄文時代中期、中でも中期後半の集落像をより明らかにするために中央広場と想定される範囲に十字にトレンチを設けることとした。それにより、想定されている環状あるいは馬蹄形集落の中央広場部分の確認や居住範囲の確定、他時期の住居の有無を確認することを目的とした。

さらに、今回の調査では、黒曜石原産地を１日２日程度で往復できる立地にある駒形遺跡がどの程度の黒曜石を消費していたのか、大まかな目安を得る目的で黒曜石のサンプリングを試みた。現時点で、茅野市内における縄文時代の遺跡において、今回の調査と同精度の黒曜石サンプリングを実施した例はないが、駒形遺跡での黒曜石消費の程度を把握するための資料とするために実施した。

2　調査の方法

今回の調査は保存目的の発掘調査であることから、平成 23・24 年度の確認調査で行った、少ない面積で広範囲を連続的に見ることのできるトレンチ法を採用した。

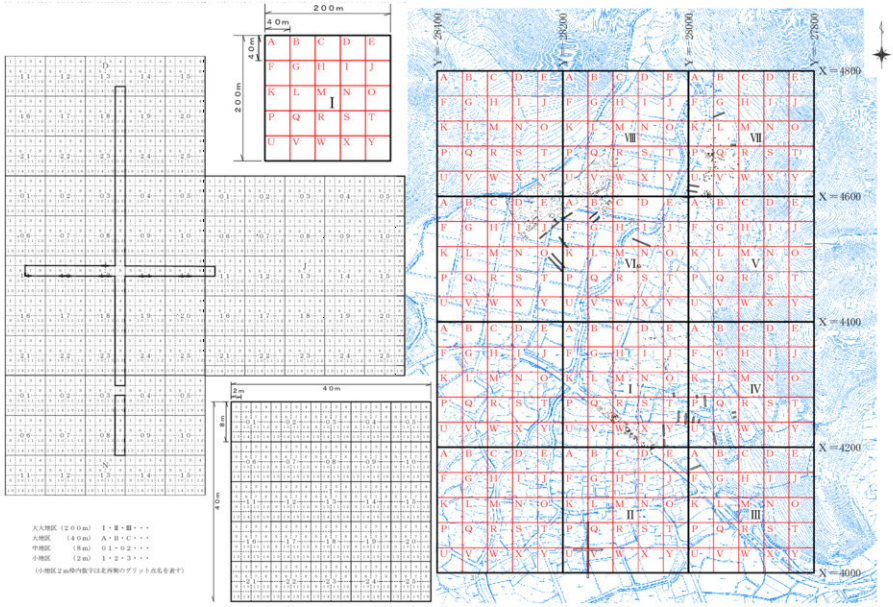
トレンチ設定にあたっては、これまでの調査に倣うことにした。平成 16･17 年度に長野県埋蔵文化財センターによって行われた県道諏訪茅野線建設工事に伴う発掘調査の際に国土地理院の平面直角座標系の原点第Ⅷ系を基点とした区画が設定された。市教委で行った平成 23・24 年度確認調査でもこの座標系を拡張して使用している。調査位置の基準を合わせるためにも拡張したグリッドを使用した。区画による地区の設定は一辺 200m の大大地区内を 25 等分した、一辺 40m 四方のグリッドを大地区とした。さらにそれを 25 等分した 8m 四方を中地区、その中それぞれを 16 等分した 2m 四方を小地区として、トレンチ設定に際してはこの小地区の 2m の幅を基準とした。

位置を特定しやすくするため、グリッドを基準としたトレンチを設けることとし、図面上で設定したトレンチ配置図を元に測量会社により現地でトレンチの角となる位置に杭を設置して、調査区の設定を行った。トレンチを設けた場所は、これまでの調査で明らかとなっている住居址から想定される、集落域の中心部で南北・東西を横切るように配置した。トレンチの大きさは幅 2m で南北に長さ 74m、東西に長さ 38m である。

3　発掘調査の経過

発掘調査の経過（抄）

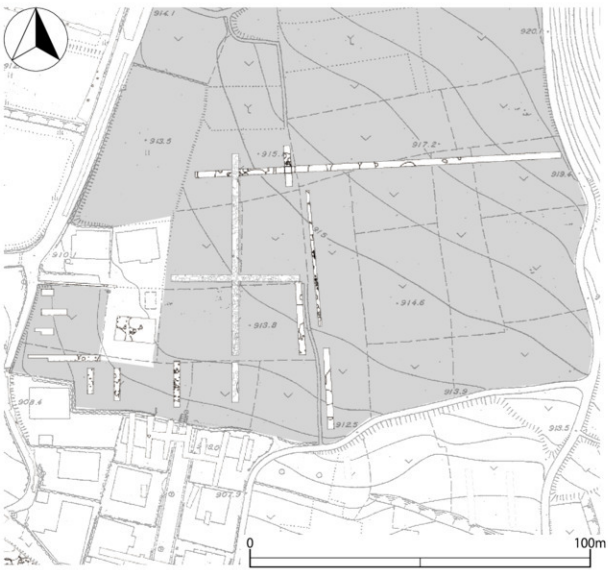
8月　8日（金）	史跡現状変更申請提出
9月 19日（金）	現状変更許可（26 受庁財第４号の 852）
11月　4日（火）	調査グリッド設定、基準点測量
11月　6日（木）	機材搬入、手掘りによる土層確認のための試掘開始、黒曜石サンプル採取開始
11月 10日（月）	重機搬入、表土剥ぎ取り作業・遺構検出作業開始
11月 21日（金）	南側トレンチ拡張
11月 25日（火）	文化庁文化財調査官水ノ江氏・長野県教育委員会指導主事櫻井氏より調査指導を受ける
12月 20日（土）	現地説明会開催
12月 24日（水）	土層観察
12月 26日（金）	重機搬入・埋め戻し、機材撤収、調査終了



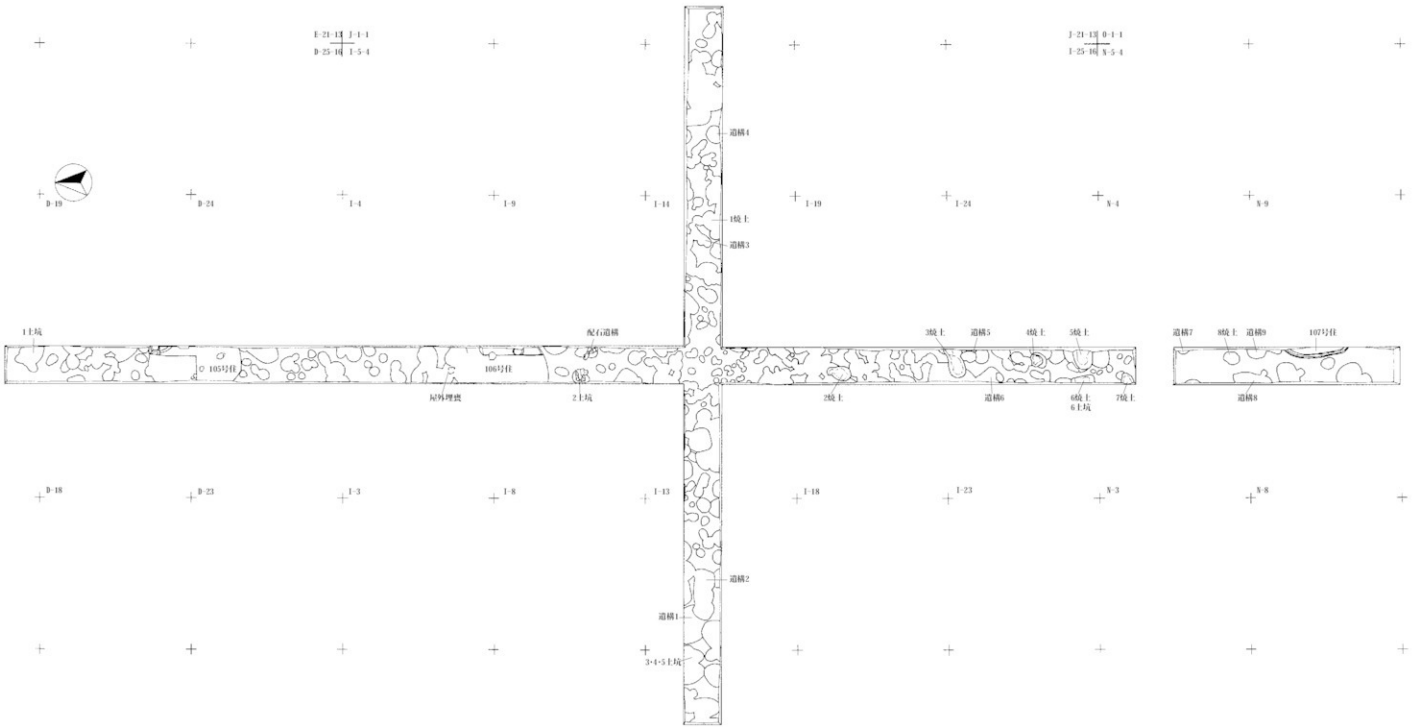
第５図　調査区（グリッド）の設定

4　成果の公開と普及

発掘調査中には地元の方に向けた現地説明会を開催し、約 60 名の参加があった。また、国史跡追加指定等のニュースが報じられたこともあり、過去の駒形遺跡発掘調査で出土した土器を使った市図書館での出張展示などを行っている。



第 6 図　トレンチの設定



第７図　トレンチ全体図 (1/200)

第３章　発掘された遺構と遺物

第１節　遺跡の層序とトレンチの状況

今回の調査で確認した標準的な層序は６層である。平成６年と８年に長野県教育委員会が行った試掘調査結果を参考に、本調査でも層序の観察を行いながら決定した。

１層　耕作土（10YR2/1）
２層　黒色土（10YR1.7/1）
３層　黒褐色土（10YR2/3）
４層　黄褐色土
５層　漸移層（10YR5/8）
６層　ローム層

発掘区中央付近に位置する東西・南北の十字トレンチ北側では耕作土層が薄く、南に向かって傾斜するにつれて厚い堆積となっている。そのため、北側では２層と４層がほとんど見られない。南に下るにしたがって３層の堆積が厚くなる。縄文時代の遺構はこの層から切り込んでいるとみられる。４層黄褐色土層は東側でのみ確認でき、他のトレンチでは見られない。

トレンチ北端の遺構検出面までの深さは 50㎝であるのに対して南側の一段下がったトレンチ南端では 115㎝であった。地表面でもトレンチ北端と南端では約 100㎝、西端と東端では約 60㎝の高低差を測る。

調査区内から検出された遺構は、住居址３軒、土坑６基、焼土址８箇所、屋外埋甕が１箇所である。これらはプランの確認のため、掘り下げを行い、遺構の性格付けを行った遺構である。その他に遺構確認作業の過程で遺物が出土した遺構９箇所がある。

遺構の分布をみるとトレンチ全体から遺構が検出されている。そのほとんどが土坑と思われ、重複しながらトレンチ全面に広がる。住居址は位置を離れながらも前期の住居址２軒を検出している。中期後半に絞れば 105 号住居址から南に住居址はみられない。トレンチ北側からは住居址のほか、屋外埋甕や配石遺構、石棒断片を含む２号土坑を確認した。トレンチ西側には土器棺墓とみられる４号土坑とそれに近接する遺構２がある。トレンチ東側からは性格は不明だが、土器の出土した遺構４と１号焼土址を確認した。トレンチ南側からは第３層中でやや集中するように６箇所の焼土址が検出された。南拡張トレンチからは住居址の他に土器の伴う土坑状の遺構３箇所、焼土址、掘り下げの際に検出した黒曜石集積遺構がある。このトレンチでの遺構の密集度は十字トレンチに比べると薄くなる。

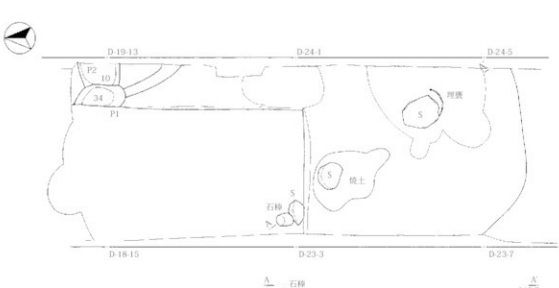
第２節　遺構と出土遺物

１　住居址

第 105 号住居址（第８・９図、図版 5-4、図版 6）

D-18-16、D-23-4 に位置している。D-18-16 で検出した遺構の落ち込みは住居址プランの北コーナー部付近と思われ、それより南側の落ち込み内は覆土である。一方、反対方向の南側プランは床面が緩く傾斜していくローム面に設けられているため、D-23-8 で流出せずに遺存する床面の範囲で捉えた。このため、床面に沿って設けられているとみられる周溝と壁は明らかにし得なかったものの、D-23-8 東壁セクションで壁の立ち上がりとみられる部分を確認している。また、D-23-4 に埋甕と焼土址を検出したので、これらの遺構と南・北プランの総合的関係から全体を推定した。

本址の主軸線は埋甕から焼土址上を通る N-40°-W になると思われる。平面形は奥壁側が直線的で、左右の両壁から出入口部へ向かって張り出す隅丸五角形とみられ、５×５ｍ程度の大きさになると考えられる。壁は奥壁で 20㎝ほどの高さとなろう。周溝は調査範囲の中では未確認である。床はローム層に掘り込んで設けられているため水平で堅緻であるが、南側コーナー部はローム面となるため一部が流出している。埋甕周辺と、覆土掘り下げの精査で確認したピット状遺構の上面には部分的に張り床がなされていた。柱穴は明らかでないがで、P1



第８図　第 105 号住居址 (1/40)

は北コーナー部の柱穴の可能性がある。南側の柱穴は明らかでないが、検出した床の範囲近くで確認したピット状の遺構が柱穴となろう。

埋甕は入口部より１mほど内側へ入った位置にある。主軸線上で､口縁部を床面と水平に合わせて正位に埋設し、平板な安山岩で石蓋がなされている。曽利Ⅲ式の深鉢形土器で、底部を抜いている。この埋甕と並んで床面に焼土址がある。90 × 60cm の範囲で不整な楕円形によく焼けている。レンガのように硬く焼けた床の上を焼土混じりの黒褐色土が覆っている。焼土址の上には人頭大の扁平礫が置かれており、その奥の床近くの覆土中に礫と分割された石棒が遺存していた。炉址は覆土を全部掘り下げていないため確認できていない。おそらく、石棒の置かれた付近から D-18-15 にかけての場所に位置していると思われる。

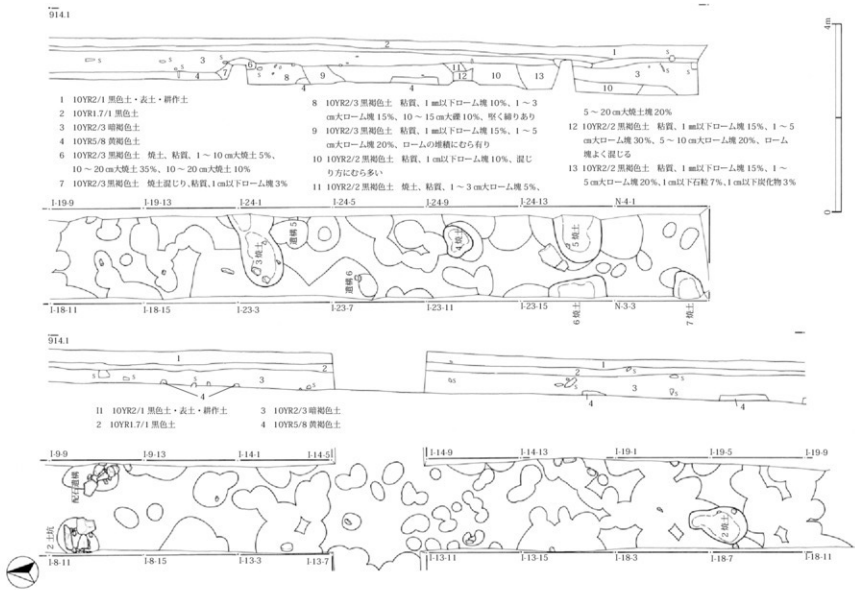
出土遺物は埋甕 (第 16 図 7、図版 21-3) のほか、D-18-16 の北壁近くの覆土中から出土した土器 (第 15 図 15)、埋甕近くの入口部付近から出土した底部 (第 15 図 24)、焼土近くから出土した石棒の断片 (第 17 図 9、図版 23-4) がある。

埋甕 (第 16 図 7) は底部が抜かれている。口縁端部がわずかに打ち欠かれ、擦れて疑似口縁状を呈している。口縁部文様帯の７箇所の渦巻文から１本の隆帯と２本一組の凹線を交互に垂下させて胴部を７区画に分割し、区画内に蛇行懸垂文を配している。第 15 図 15 はやや粗い綾杉状沈線を地文とし、２本一組の隆帯を垂下させた区画内に蛇行隆帯を配している。第 15 図 24 は網代痕のある深鉢の底部である。第 17 図 9 は黄白色系の色調を呈す円柱状の石棒の胴部断片である。切断面以外は全面が丁寧に擦られた磨面で、つくりの良い石棒である。裏面の中央一部が平坦面となっており、この部分と正反対の表側の部分のみ淡い褐色で色調が違っている。

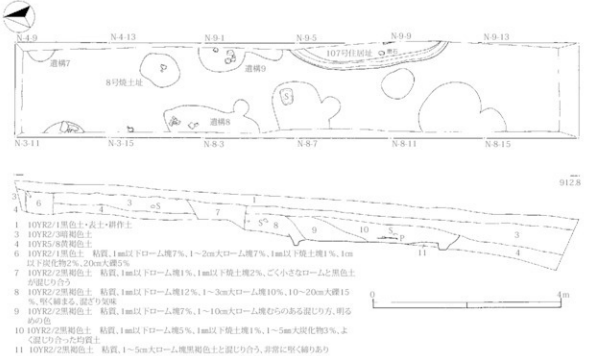
第 106 号住居址 (第９図、図版 7)

I-3-16、I-8-4 に位置している。北側プランの一部となる I-3-16 では、I-3-12 の屋外埋甕を中心とする土坑状遺構の重複でプランが捉えられない。それらの遺構は、本址よりも新しい時期の遺構とみられる。一方の南側は、I-8-8 において北側へ弧状にまわる浅い落ち込みを確認し、これが南側のプランになると認めた。規模は明らかでないが、径５m程度の円形プランの住居址になると思われる。

第９図　南北トレンチ平面・断面図 (1)(1/80)



第 10 図　南北トレンチ平面・断面図 (2) (1/80)



第 11 図　南北トレンチ平面・断面図 (3)(1/80)

覆土は掘り下げずにグリッド東壁下にサブトレンチを設けたところ、床面と柱穴、壁の一部を確認した。壁は南壁の一部でローム壁となり、高さは 5cm 前後と浅い。床面は軟弱で凹凸がある。柱穴は P1 の一箇所を検出した。床面からの深さは 67cm である。南側が出入口部となるので、出入口部に近い南東側の主柱穴になると考えられる。遺物はサブトレンチの床面から深鉢の胴下部 (第 16 図 5) が逆位で出土した。このほか、サブトレンチに掛かる覆土中に大形の扁平礫が遺存していた。

第 16 図 5 は、胎土に灰色や白色の粒子を多く含む黄白色系の色調を呈する深鉢形土器である。地文は単節の斜縄文で、底部近くには 3 本の細い粘土紐を貼付している。胴下部は貼付した 3 本の細く薄い粘土紐に矢羽状の刻みをつけ、さらに粘土紐間に連続刺突文を巡らせる文様構成が 2 段に配されている。諸磯 b 式相当の土器と思われる。

第 107 号住居址 (第 11 図、図版 8-1)

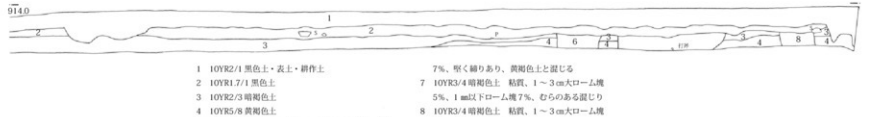
N-8-8、N-8-12 の東側に周溝を中心とする住居址の西側プランの一部を検出した。本址の設けられた位置は駒形遺跡の乗る台地の南肩部で、地山のローム層が下段の平地に向かって深く傾斜していく地形の変換点となる場所である。このため住居址南側の床は張り床となっている。

本址は推定 5.5 × 4.5 mほどの隅丸方形と考えられ、主軸は北から西側にわずかに振れている。ローム層に掘り込んでいるため北側では 10cm 弱のローム壁を検出したが、壁は西側に徐々に減じて幅 20cm の周溝のみのプランとなっている。床は南側が張り床であるが、全体に堅く良好である。

遺物は床近くの覆土中でセクションに掛かって一括土器 (第 16 図 2、図版 21-2) が出土したほか、周溝脇の床面に磨石 (第 17 図 8、図版 22-8) が遺存していた。そのほかは安山岩の礫器 (第 17 図 3、図版 22-3) と黒曜石が 11 点ある。

第 16 図 2 は、口縁端部に刻みが施され、刻みのある不定形な山形の突起を 4 単位に設けた深鉢である。胴下部は明らかでないが、尖底になるかと思われる器形である。胎土に微量の繊維を含み、やや薄手で焼成は比較的良い。縄文は多段のループ文である。前期前葉の土器である。第 17 図 8 は平坦な磨面をもつ安山岩の磨石である。

1 10YR2/1 黒色土・表土・耕作土
2 10YR1.7/1 黒色土
3 10YR2/3 暗褐色土
4 10YR5/8 黄褐色土
6 10YR3/4 暗褐色土　粘質、1～3㎝　大ローム塊
7%、炭く縞りあり、黄褐色土と混じる
7 10YR3/4 暗褐色土　粘質、1～3㎝大ローム塊
5%、1㎜以下ローム塊7%、むらのある混じり
8 10YR3/4 暗褐色土　粘質、1～3㎝大ローム塊
3%、黒色土と混じる斑



1 10YR2/1 黒色土・表土・耕作土
2 10YR1.7/1 黒色土
3 10YR2/3 暗褐色土
6 10YR2/2 黒褐色土　粘質、1㎜以下ローム塊　10%、1～5㎝大ローム塊15%、縞り不均一
7 10YR2/3 黒褐色土　粘質、1㎜以下ローム塊　10%、1～5㎝大ローム塊30%、ローム塊多い、黒褐色土は均一
8 10YR2/2 黒褐色土　粘質、1～5㎝大ローム塊5%、黒色土と混じり斑状
9 10YR2/1 黒色土　粘質、1㎜以下ローム塊 10%、1～3㎝大炭化物3%、色不均一で混ざり合う
10 10YR2/1 黒色土　粘質、1㎜以下ローム塊7%、1～5㎝大ローム塊10%、黒色土塊混じる、炭く縞りあり

0
4m

第12図　第四トレンチ平面・断面図(1/80)

2　土坑

第１号土坑（第 13 図、図版 8-2・3）

D-13-16 に位置する。当初広く黒色土の落込みが見られたため住居址と捉え精査し、土坑と確認された。グリッド外東壁に続くため全体像は不明だが、平面形は不整楕円形で規模は 75 × 60㎝と推測される。断面形は中央付近がやや高くなるが鍋底状を呈する。耕作による撹乱を深く受けており、遺構として残っているのは底部約 9㎝のわずかな部分のみである。近くからは曽利Ⅱ式期の土器片（第 15 図 14）が出土している。第１号土坑に伴うものではないと思われるが、近い時期の土坑と思われる。14 は頸部が膨らみ、やや丸みのある胴部となる深鉢形土器で、欠損のある頸部は擬似口縁となっている。頸部は横位の文様帯となり、胴部は縦位の条線を地文として沈線による渦巻文と蛇行懸垂文が施文されている。

第２号土坑（第 13 図、図版 9-1・2）

I-8-12 西側に位置し、一部西壁に続く。反対の東壁には配石遺構がある。グリッド外西壁に続くため判然としないが、平面形は不整楕円形で規模は 95 × 70㎝と推測される。断面形は鍋底状を呈する。

土坑内中央には２点の長大な礫が位置し、その下と周辺に拳大の礫が集中している。長大な礫の一つは安山岩製の大型石棒の端部（第 17 図 10、図版 23-1）である。基部にあたると思われるが、頭部であるとすれば無頭の先端が丸くやや尖った形状をし、丁寧に成形されている。残存している部分は長さ 30㎝、最大径 21㎝の砲弾形を呈する。もう一つは安山岩の角のない礫である。長さ 55㎝、最大径 15㎝の長大な礫だが、加工したような痕跡はみられない。しかし、石棒断片と同じ向きで出土したことから、自然石を利用した石棒に関わるものと考えられる。これらの下から出土した礫群は遺構検出の際に取り除いてしまったものもあるが、石棒断片周辺及びその下から検出された礫の中には打製石斧１点（第 17 図 2、図版 22-2）と安山岩の板状礫器４点（第 17 図４～７、図版 22-4 ～ 7）を含んでいる。２は打製石斧の頭部折れ端である。４～７はいずれも扁平で一辺あるいは二辺に敲打痕がみられる。直径７～ 12㎝の円形もしくは楕円形を呈している。4・5・7 は壁際からまとまって出土している。

第３号土坑（第 13 図、図版 9-3、図版 10-2、図版 11-1）

I-11-8 に位置し、第４・５号土坑と切り合う。第４・５号土坑掘り下げの際に確認された。周囲の土坑や遺構と重なるため、判然としないが残存部分の平面形は円形で規模は 45 × 45㎝と推測され、深さは遺構確認面から 55㎝下がる。断面形は柱根状を呈する。第４・５号土坑を切っており、３基の中では最も新しいと思われる。

第４号土坑（第 13 図、図版 9-3、図版 10、図版 11-1）

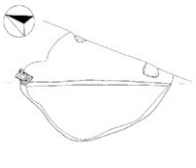
I-11-8 に位置し、第３・５号土坑と切り合う。耕作による撹乱が入り込んでおり、遺構上部は乱され、掘り込みは不明。遺構の一部はグリッド北壁に入り込んでいる。平面形は楕円形で規模は 85 × 70㎝と推測され、深さは遺構確認面から 50㎝下がる。断面形は鍋底状を呈する。第５号土坑に切られ、第３号土坑を切っており、それら２基の間の時期の土坑と思われる。この土坑は底部を欠いた曽利Ⅳ式期深鉢（第 16 図 8、図版 21-5）が正位で出土した土器埋設遺構で、土器棺墓と考えられる。深鉢に対して大きく土坑が掘られており、その中央に配置されていた。土坑の底から 28㎝上がった状態で検出された。8 は底部の抜かれた大形深鉢の胴部である。X 字把手の付く大形深鉢であるが、口縁部から胴上部は失われている。櫛状工具にある条線を地文とし、低い隆帯による大柄な渦巻文が構成されている。

第５号土坑（第 13 図、図版 9-3、図版 10-2、図版 11-1）

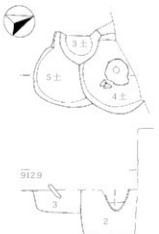
I-11-8 に位置し、第３・４号土坑と切り合う。周囲の土坑や遺構と重なるため、判然としないが残存部分の平面形は楕円形で規模は 110 × 75㎝と推測され、深さは遺構確認面から 25㎝下がる。断面形は鍋底状を呈する。第３・４号土坑に切られており、３基の中では最も古いと思われる。

第６号土坑（第 13 図、図版 11-2）

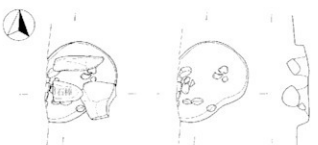
I-23-16 に位置し第６号焼土址の下から検出された。グリッド西壁に続くため、全体は不明だが、平面形は不整円形で規模は 50 × 50㎝と推測される。深さは遺構確認面から約 17㎝下がる。断面形は鍋底状を呈する。土坑中央からは井戸尻式期の底部を欠いた深鉢（第 16 図 6、図版 21-1）が中央から横向きに倒れた状態で出土した。



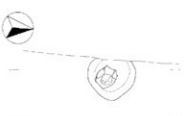
1 号土坑
1　10YR2/3 黒褐色土　粘質、1 ㎜以下ローム塊 5%、5 ～ 20 ㎝大ローム塊 7%、1 ～ 5 ㎝大礫 1%、20 ～ 30 ㎝大礫 1%、黒色土とローム が斑状に混じる



3・4・5 号土坑
1　10YR2/3 黒褐色土　黒色に近い暗色、粘質、1 ～ 5 ㎜大ローム塊 8%、5 ㎝以下炭化物 3%
2　10YR2/3 黒褐色土　粘質、1 ㎜以下ローム塊 10%、1 ～ 5 ㎝大ローム塊 10%、ローム塊混って土質均質
3　10YR2/3 黒褐色土　粘質、1 ㎜以下ローム塊 10%、1 ～ 5 ㎝大ローム塊 7%、ローム塊バラバラの大きさ

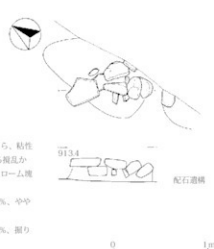


2 号土坑



6 号土坑

屋外埋甕
1　10YR2/3 黒褐色土　色の抜けたような黒色まだら、粘性弱、ボソボソ、5 ㎜以下ローム塊 1%、根による撹乱か
2　10YR2/3 暗褐色土　明黄色、粘質、1 ～ 5 ㎜大ローム塊 10%、5 ～ 10 ㎜大炭化物 5%
3　10YR 暗褐色土　粘質、1 ～ 5 ㎜大ローム塊 15%、ややボソボソ
4　10YR3/3 暗褐色土　粘質、1 ㎜以下ローム塊 3%、撹り方埋土
5　10YR4/6 褐色土　粘質、1 ㎜以下ローム塊 5%、1 ～ 3 ㎝大黒色土塊 35%



第 13 図　土坑・屋外埋甕・配石遺構 (1/40)

6は短い口縁部が「く」の字形に開く深鉢形土器で底部は打ち抜かれている。口縁部の4個所の突起から胴部に押圧隆帯を垂下させてつなぎ、連続した区画を構成している。区画内には円形文・渦巻文・三叉文・玉抱三叉文・弓形文などの複雑な文様が施文されている。これらの文様は押圧隆帯の脇に施文された連続刺文と同様すべて連続刺突文により施文されている。

3　屋外埋甕（第13図、図版11-3、図版12-1・2）

I-3-12に位置している。底部を欠いた曽利V式期の大形深鉢（第16図9、図版21-4）が正位で単独埋設されている。他の遺構と重なり掘り込みは不明。穴の大きさは直径約50cmで埋甕より一回り大きく、すり鉢状を呈する。埋甕の口縁までは44cmを測る。9は内湾する口縁部がラッパ状に開いた深鉢で、底部は抜かれて欠損している。口縁部から胴部にかけて沈線による区画をなし、区画内には上端に勾玉状の刺突文を配し、以下は列点状の沈線が充填されている。

4　配石遺構（第13図、図版12-3、図版13-1）

I-8-12に位置し、西側には第2号土坑がある。遺構を構成する礫の一部がグリッドの東壁中にも検出されているため、本址はさらに東側へ続いているものと思われる。しかしながら東南側はI-14・15列で確認できていないため、延びていても第4次調査の配石址につらなる程の規模はないものと思われる。礫は人頭大礫を中心に、遺構確認面に近い第3層中に水平で列状に配列されている。第2号土坑はその先端に続く位置にあり、土坑内の大形扁平礫はこの配石遺構と同レベルである。また、調査トレンチの中で礫が集中するのはこの一角であり、両者は関連性があると思われるが、両者の時期も含め、関係は明らかにし得なかった。

5　焼土址

第1号焼土址（第14図、図版13-2）

I-14-8に位置している。焼土は100×80cmの楕円形で、遺構確認面より10cmほどの厚さで堆積している。北と南側に本址に続く遺構の落ち込みを確認したが、焼土のプラン全体がわずかながらも観察されたため、焼土はそれらの遺構より新しいとみられる。断面観察のため半裁したところ、ローム層に掘り込んだ皿状のくぼ地に堆積する焼土下に小ピットを検出した。ピット内からは土器の小破片（第15図2）が出土している。焼土の脇から小型の磨製石斧（第19図1、図版24-1）が出土しているが、石斧に焼けた痕跡は認められない。土器（第15図2）は繊維を微量に含む無節の斜縄文で、円形の刺突文がある。前期前葉の土器とみられる。

第2号焼土址（第14図、図版13-3、図版14-1）

I-18-4・8に位置しており、層位的には第3層の中位にある。125×75cmの楕円形で、北側がわずかに円形に張り出している。焼土は浅い皿状のくぼみに堆積している。出土した土器は2点（第15図3・5）で、3は底部付近と思われ、単節斜縄文が施文されている。加熱のため変色し、胎土も硬く変質している。5は中越式の胴部破片である。

第3号焼土址（第14図、図版14-2・3）

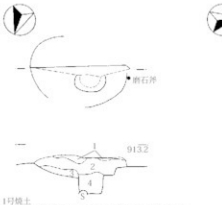
I-23-4に位置しており、層位的には第3層の中位にある。160×85cmの長楕円形で、さらにグリッドの東壁外へ続いている。焼土は浅い皿状のくぼみに20cm程度の厚さで堆積している。上面から打石斧の欠損品（第17図1、図版22-1）が出土している。

第4号焼土址（第14図、図版15-1・2）

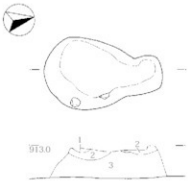
I-23-12に位置しており、層位的には第3層の中位にある。70×60cmの大きさであるが、さらにグリッドの東壁外に続いていることが壁のセクションで観察される。焼土の厚さは10～20cm程度で、浅い皿状のくぼみに堆積している。

第5号焼土址（第14図、図版15-1・3）

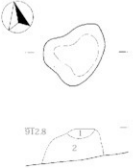
I-23-16に位置しており、層位的には第3層にある。西側の第6号焼土址と接近した位置関係にある。発掘し



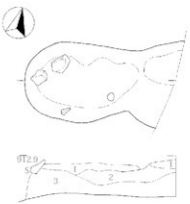
1号焼土
1　10YR2/3黒褐色土　粘質、10～20cm大焼土50%
2　10YR3/4暗褐色土　粘質、1mm以下ローム塊10%、1～3cm大ローム塊5%、1mm以下焼土塊8%、1～10mm大炭化物2%、よく締まる
3　10YR3/4暗褐色土　粘質、1mm以下ローム塊8%、10～30cm大ローム塊15%、
4　10YR2/3黒褐色土　粘質、1mm以下ローム塊8%、1mm以下焼土塊1%、1～3cm大炭化物2%、20cm大炭化物7%



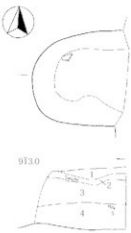
2号焼土
1　2.5YR5/8明赤褐色土　焼土、10YR2/4暗褐色土内に焼土混じる
2　10YR3/3暗褐色土　焼土混じり暗褐色土、粘質、1mm以下ローム塊3%、5mm以下焼土塊5%、堅く締まる
3　10YR3/3暗褐色土　粘質、1～5mm大ローム塊8%、1～3cm大ローム塊5%、部分的に黒色土混じる



4号焼土
1　10YR2/2黒褐色土　焼土、粘質、1～3cm大ローム塊5%、5～20cm大焼土塊20%、3cm大礫1%、
2　10YR2/3黒褐色土　粘質、1～3cm大ローム塊3%、1mm以下焼土塊3%、1～5cm大礫3%、明るめの黒色

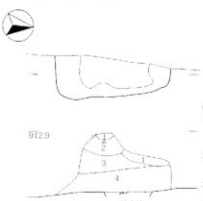


3号焼土
1　10YR2/3黒褐色土　焼土、粘質、1～10cm大焼土5%、10～20cm大焼土35%、10～20cm大焼土10%
2　10YR2/3黒褐色土　焼土混じり、粘質、1cm以下ローム塊3%
3　上部10YR2/3黒褐色土　粘質、1cm以下ローム塊5%、1mm以下焼土塊3%、1cm大炭化物1%、堅くよく締まる、下部10YR3/4暗褐色土　粘質、1～10cm大ローム塊20%、混入物少ない

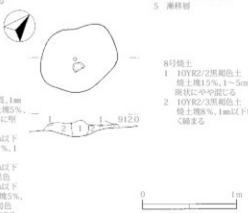


5号焼土
1　10YR2/3黒褐色土　濃い焼土、粘質、10～20cm大焼土塊50%、灰のような暗褐色の物が混じる
2　10YR2/2黒褐色土　焼土混じり、粘質、1mm以下焼土塊8%、炭化物3%、20～30cm大礫1%
3　10YR2/2黒褐色土　粘質、1～10mm大ローム塊8%、1mm以下焼土塊10%、5～10mm大炭化物3%、1mm以下石粒5%、混入物多い
4　10YR2/3黒褐色土　粘質、1mm以下ローム塊7%、1mm以下焼土塊3%、1mm以下炭化物1%、ごく小さなローム土焼土塊よく混じる

7号焼土
1　10YR2/3黒褐色土　粘質、1～5cm大焼土塊15%
2　10YR2/2黒褐色土　粘質、1mm以下焼土塊10%、非常に堅くよく締まる
3　10YR2/2黒褐色土　粘質、1～5mm大ローム塊10%、1mm以下焼土塊1%、5cm大礫1%、堅くよく締まる
4　10YR2/3黒褐色土　粘質、1mm以下ローム塊7%、灼質
5　漸移層



6号焼土
1　10YR2/3黒褐色土　焼土、粘質、1mm以下焼土塊3%、1～5cm大焼土塊5%、20～30cm大焼土塊10%、非常に堅く締まる
2　10YR2/2黒褐色土　粘質、1mm以下ローム塊1%、1mm以下焼土塊1%、1mm以下石粒3%、5cm大礫1%
3　10YR2/2黒褐色土　粘質、1mm以下石粒5%、きめ細かい、暗めの黒色
4　10YR2/3黒褐色土　粘質、1mm以下ローム塊5%、1～3cm大ローム塊5%、1mm以下炭化物1%、明るい黄褐色土やや混じる、きめ細かくよく締まる



8号焼土
1　10YR2/2黒褐色土　粘質、1mm以下焼土塊15%、1～5cm大焼土塊20%、斑状にやや混じる
2　10YR2/3黒褐色土　粘質、1mm以下焼土塊8%、1mm以下ローム塊5%、よく締まる

第14図　焼土址(1/40)

た部分は 100 × 100cm の大きさであるが、さらにグリッドの東壁外へ続いている。焼土は 20cm 程度の厚さがあり、下面は浅い皿状である。出土土器は 3 点 (第 15 図 10・22・23) で、10 は深鉢の無文口縁部、22・23 は堀之内 1 式の深鉢の口縁部である。22 は口縁部直下に沈線を巡らせ、23 は刺突を加えている。ともに加熱のため変色し、胎土も硬く変質している。

第 6 号焼土址 (第 14 図、図版 16-1)

I-23-16 に位置しており、層位的には第 3 層にある。東側の第 5 号焼土址と接近した位置関係にある。発掘した部分は 125 × 40cm の大きさであるが、さらにグリッドの西壁外へ続いている。焼土は二つの皿状のくぼみに堆積している。出土遺物は石鏃が 2 点ある。本址の下部には中期中葉井戸尻式の深鉢が遺存した第 6 号土坑が位置している。

第 7 号焼土址 (第 14 図、図版 16-2)

N-3-4 に位置しており、層位的には第 3 層の中位にある。65 × 60cm の大きさであるが、さらにグリッドの西壁外へ続いている。焼土は浅い皿状の小さなくぼみに堆積している。遺物は堀之内 1 式とみられる土器が 1 点 (第 15 図 21) と石鏃が 1 点出土している。

第 8 号焼土址 (第 14 図、図版 16-3)

N-3-16 で、第 107 号住居址の北 3 mに位置している。85 × 70cm の楕円形で、遺構確認面より 10cm ほどの厚さがあり、ローム層に浅く掘り込んだ皿状のくぼ地に堆積している。中央上面に拳大の礫が遺存していたほか、土器が 1 点 (第 15 図 1) 出土している。土器は早期末の条痕文系土器で、表面は擦痕状であるが、内面の条痕は明瞭である。

6　黒曜石集積遺構 (図版 17-1、図版 24-6・7・8)

第 107 号住居址の南に位置する N-8-16 の中央やや南寄りの地点で、地表下 30cm の第 3 層の上部から拳大以下の黒曜石 3 点がまとまって出土した。3 点は北から№ 1(図版 24-6)、№ 2(図版 24-7)、№ 3(図版 24-8) である。時期は特定できない。3 点の法量につては第 7 表に記載してある。

7　その他の遺構

遺構確認面で覆土の落ち込みから存在を確認した遺構は、覆土を掘り下げることなく確認面での平面プランで記録した。この遺構確認作業の過程で遺物が出土した遺構について記す。

遺構 1 (第 12 図)

I-12-5 に位置する。南北方向に長軸をもつ東西約 2 mの楕円形の遺構である。西側には甕棺を伴う第 4 号土坑があり、南側は焼土を伴う遺構と土坑状の遺構に切られている。上面の中程の位置に拳大の焼土塊が遺存していた。曽利Ⅳ式の土器片 (第 15 図 17) が 1 点出土している。

遺構 2(第 12 図)

I-12-6 に位置する。グリッドの中央で、土坑状の遺構が3箇所ほど重複して東西につらなる遺構の東端部である。出土した土器 (第 15 図 20) は縄文を地文とする波状口縁の深鉢で、無文の口縁下に断面三角形の隆帯がめぐる中期終末の土器である。

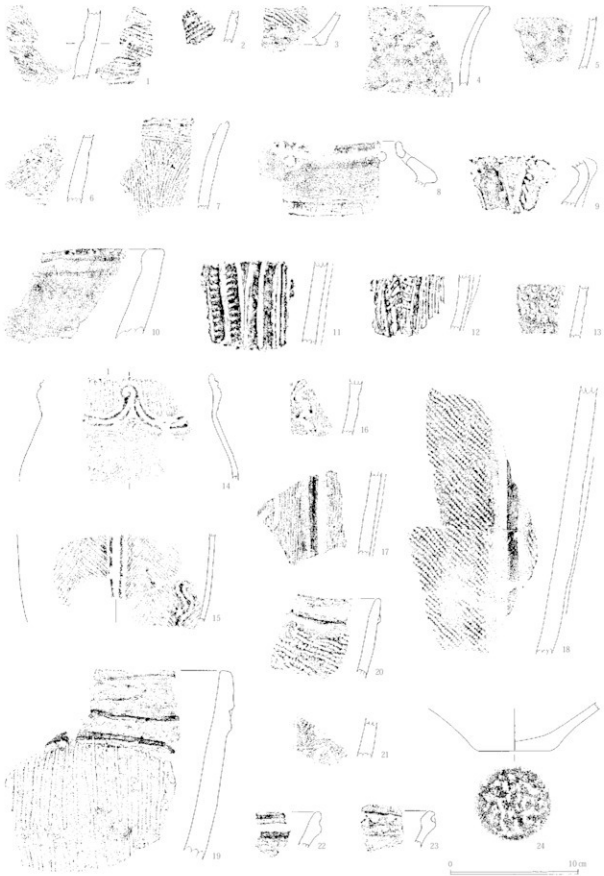
遺構 3(第 12 図)

I-14-7 で、東隣の I-14-8 に位置する第 1 号焼土址と隣接している。重複する径 50cm のピット状の遺構で、中越式土器の口縁部 (第 15 図 4) が 1 点出土している。

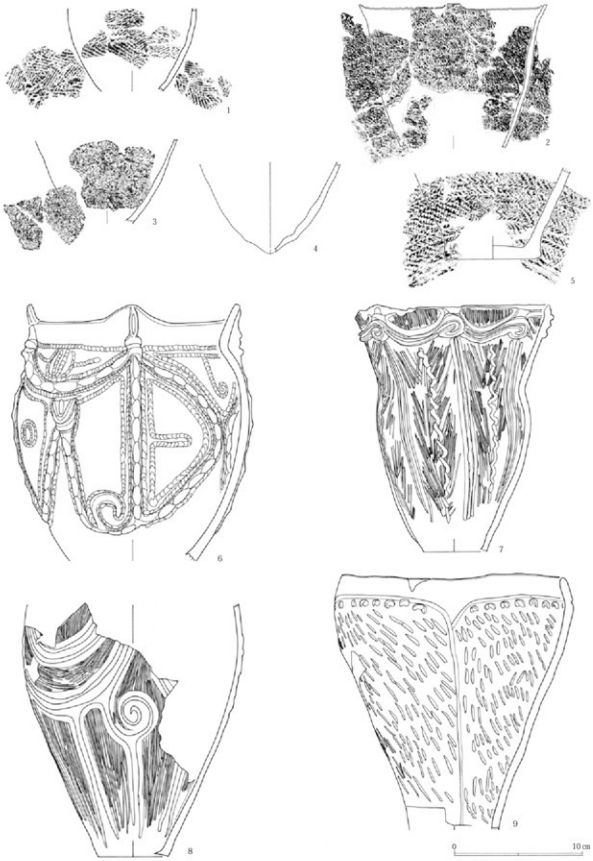
遺構 4(第 12 図、図版 17-2)

I-15-8 の南壁下に検出された遺構である。やや大形の礫を伴う径 80cm 前後の円形を呈する土坑状の遺構で、プランの 1/2 程はグリッドの南壁外へ続いている。土器数点が遺構確認面より 15cm ほどの高さでまとまって出土した。出土した土器 (第 15 図 9・18) は井戸尻式の深鉢の口縁部と加曽利 E 式系の大形深鉢の胴部である。

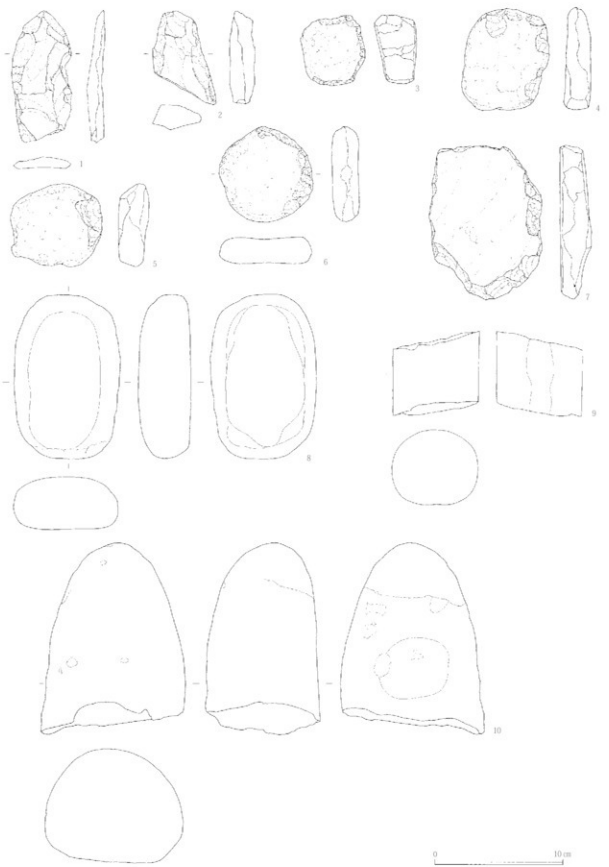
遺構 5(第 10 図、図版 14-2)



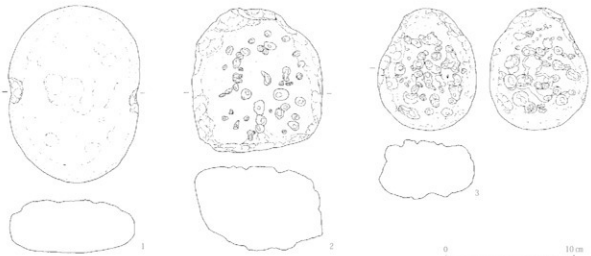
第 15 図　道構出土土器 (1)(1/3、14・15 は 1/6)



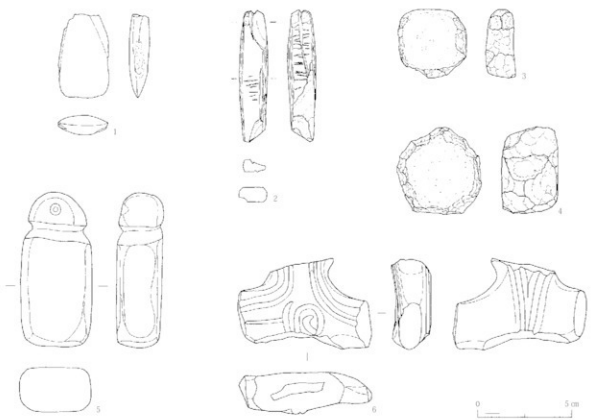
第 16 図　遺構出土土器 (2)(1/6、5・6は 1/3)



第 17 図　遺構出土石器 (1/3、9・10 は 1/6)



第18図　出土石器(1/6)(1は1/3)



第19図　出土石器・石製品・土製品(1/2)

I-23-4 の東壁下に位置する。北側の第３号焼土址と、南側に接する柱痕のある土坑状遺構の間に位置する径 50 ～ 60cm の土坑状の遺構である。土器 (第 15 図 16・19) は曽利Ⅳ～Ⅴ式期の２点が出土している。

遺構 6(第 10 図)

I-23-8 に位置する。西壁下から北隣の I-23-4 の南西隅にかけて広がる隅丸方形とみられる遺構である。プランの南側で礫２点とともに梨久保 B 式系統の土器 (第 15 図 12) が１点出土している。

遺構 7(第 11 図)

N-3-12 の東壁下に位置する。第３層から掘り込んだ径 60cm の土坑状の遺構で、東側 1/2 ほどはグリッドの東壁外にある。中期の井戸尻式とみられる土器 (第 15 図 11) が１点出土している。

遺構 8(第 11 図、図版 17-3)

N-3-16 から N-8-4 にかけての西壁下に位置する。東側には第８号焼土址が位置し、南側には扁平礫を伏せた隅丸方形の遺構がある。本址の中心部はグリッドの西壁外に広がっているものと思われる。遺構の上面から土器２個体 (第 16 図 3・4) が 30cm ほど離れ、3 が南側、4 が北側から出土した。ともにやや厚手で内外面に成形の凹凸を残す、比較的焼成の良い中越式の実底土器である。

遺構 9(第 11 図、図版 17-3)

N-8-4 の東壁下で、南側に第 107 号住居址が位置している。第３層から掘り込んだ径 100cm の土坑状の遺構で、東側 1/2 ほどは壁外にある。上面に拳大の角礫数点とともに土器３点 (第 15 図 6・7・8) が遺存していた。土器は諸磯ｃ式期のもので、8 には赤彩の痕跡が認められる。

第３節　遺構外の出土遺物

今回の調査ではコンテナ 18 箱分の遺物が出土している。調査の性格上、確認した遺構は一部の遺構を部分的に精査するにとどめたため、遺物は遺構内出土のものは少なく、大方が遺構外からの出土である。そのうち、土器は量的な多寡はあるものの、早期は押型文から条痕文系土器まで、前期は初頭から末までの各型式が認められる。なかでも前期前葉の縄文施文の一群の中に胎土に微量の繊維と黒曜石破砕粒子を混入する類があり、黒曜石原産地と関係する在地色の強い土器として注目される。中期は初頭後半から藤内Ⅰ式までを欠く中期末までの全期間のもの、後期は加曽利 B2 式までのものが認められる。

石器は石鏃、石錐、打石斧、磨石斧、石匙、礫器、凹石、磨石、特殊磨石、石錘などが出土している。また、石鏃を含めた黒曜石の総重量は 9.614 g である。ここではそれらの遺物の中から特徴的なものの一部を図示する。なお、石鏃等の黒曜石製石器については第４節で詳述してある。

土器・土製品 (第 16 図 1、第 19 図 6、図版 24-9)

第 16 図 1 は N-3-16 西壁下から出土した。遺構に伴っていないが、第８号焼土址の西１ｍの位置であり、南側には一括土器２個体を出土した遺構８がある。実底の深鉢とみられ、繊維を含み、内面には成形の凹凸が残る。縄文は横位羽状の菱形構成である。前期初頭の土器であろう。

第 19 図 6 は把手か土偶の一部と思われる焼成の良い土製品である。表面は渦巻きの玉抱三叉文、裏面は隆帯をＶ字形に構成している。D-18-16 の出土である。

石製品 (第 18・19 図)

第 19 図 1(図版 24-1) は第１号焼土址の脇から出土した小型の磨製石斧である。

第 19 図 2(図版 24-2) は切目石錘である。擦り切り痕を残す本体の長軸端に切れ目を入れている。切目石錘は縄文後期の遺物とされており、諏訪地方では諏訪湖周辺の遺跡で発見されている。漁網用の錘であり、礫床で流れの早い山麓部の河川漁労には別の礫石錘が用いられたと考えられてきた。本例は山麓部に位置する茅野市の縄文遺跡では初の出土である。

第 19 図 3・4(図版 24-4・5) は安山岩の板状礫を用いた礫器である。周囲を両側から打ち欠いて円形に整えており、4 は厚みがある。何点かの出土品のうち２点を図示したが、ほかにも第 107 号住居址から１点 (第 17 図 3)、

第２号土坑から同様な礫器４点（第17図４～７）が出土している。

第19図５（図版24-３）はD-18-８の東壁セクションの第３層上面より出土した。矩形安山岩の角礫の角を落として断面形を隅丸方形に整え、片側端部に溝を切って丸い頭部を作り出している。頭部の片側の中央に円形の浅い凹みを一箇所設けている。小型の石棒の一種であろうか。

第18図１（図版22-９）は13.8×10.2cmの大形石錘である。安山岩の扁平円礫で、両側縁の中央に簡単な凹部をつけている。平坦な両面には浅い敲打痕が認められる。大形であり、茅野市内の遺跡としては稀な例である。

第18図２・３（図版23-２・３）は多孔石で、２は表採、３はI-23-８の出土である。

第４節　黒曜石サンプルと黒曜石製石器について

今回の調査では、黒曜石原産地を１日２日程度で往復できる立地にある駒形遺跡がどの程度の黒曜石を消費していたのか、大まかな目安を得る目的で黒曜石のサンプリングを試みた。現時点で、茅野市内における縄文時代の遺跡において、今回の調査と同等の黒曜石サンプリングを実施した例はなく、駒形遺跡での黒曜石消費の程度をわかりやすく示すことはできないが、今後に活用すべく実施した。

１　サンプリングの方法

第20図に示したように、トレンチ内において50cm×50cmのサンプリンググリッドをおおむね４m間隔で設定した。これらを見ると、多くのサンプリンググリッドは遺構確認面で認識できる各種遺構の上位にあたり、特に竪穴住居上位にある場合は遺構に廃棄された黒曜石を多数含むと考えられる。もちろん、サンプリングをする際にもその点は予測され、理想としては層位ごとにサンプリングできればと考えたが、限られた調査期間であることに加え、表土からサンプリングを行うことにしたため、今回はいわゆる半スコを深さの単位としてサンプリングした。

サンプリングした資料は深度単位で土嚢袋に入れ、尖石縄文考古館の水洗洗浄室で1mmメッシュの金属製ふるいで土壌と黒曜石等に選別した。ふるいメッシュのワイヤーの太さは0.588mmである。選別後、黒曜石等の重量を小数点以下第２位まで測定できる電子はかりで計測した。

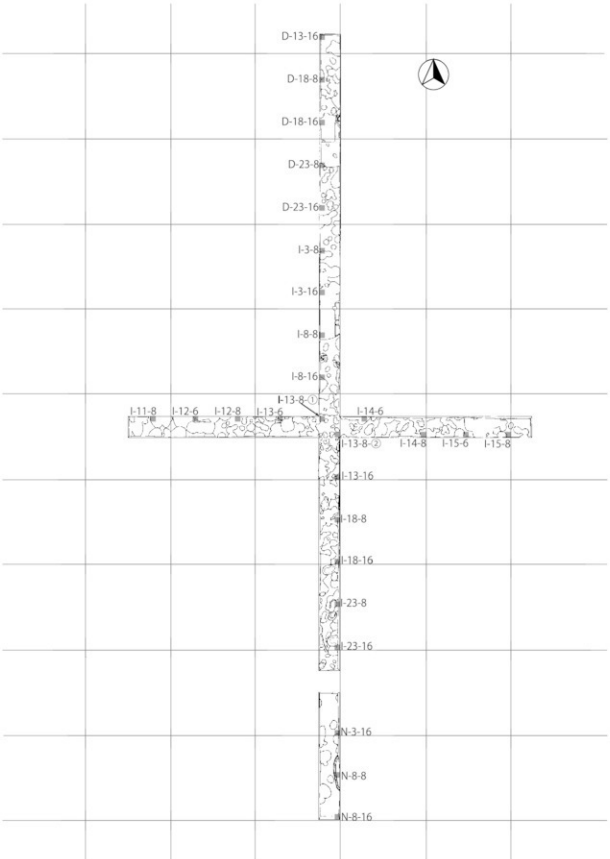
２　サンプリングした黒曜石の重量

サンプリングした黒曜石の各サンプリンググリッドおよび深度ごとの重量データを第５表に示した。これらのサンプリンググリッドのうち、調査の結果竪穴住居の上位にあると判断できるものは、D-18-16、D-23-８：曽利Ⅲ式期、I-３-16、I-８-８：諸磯ｂ式期、N-８-８：中越式期、の合計５つである。

サンプリングした黒曜石の総重量を見ると19.23gから150.41gまで幅があるが、深度が４～11までばらつきがあるため、黒曜石の重量の多寡をすぐに議論するわけにはいかない。しかし、たとえばもっとも北に位置するD-13-16サンプリンググリッドでは深度４までで77.16gの黒曜石が得られた。トレンチ内ではこのサンプリンググリッドの下に遺構は確認されていないが、中期後半の環状を呈するであろう竪穴住居分布域に含まれる可能性が高い。また、曽利Ⅲ式の竪穴住居が下にあったサンプリンググリッドD-18-16、D-23-８も62.53、63.83gと、重量0.１～0.5g程度の微細な剥片でほとんどが占められている状況でありながら、D-13-16グリッドと極端な差はない程度の黒曜石が含まれている。

ところで、同じ霧ヶ峰南麓の中期後半の竪穴住居出土黒曜石の重量を棚畑遺跡を例に、手元に重量データがある曽利Ⅰ式期およびⅡ式期の住居址で確認すると、多いもので曽利Ⅰ式期の45号住居址の黒曜石集積だけでも736.5g、41号住居址で618.5g、曽利Ⅱ式期の86号住居址で663.4g、32号住居址で506.6gといった例がある。少ないものでは、曽利Ⅰ式期の36号住居址で48.9g、30号住居址で75.2g、曽利Ⅱ式期の43号住居址で14.3g、15号住居址で94.1gといった状況である。この少ない住居址の例と比較すると、思いのほか多くの黒曜石がサンプリング資料に含まれているという実感がある。

八ヶ岳西南麓の福沢中原遺跡でも完掘した第４号住居址（曽利Ⅱ～Ⅲ式期）で258.5g、ほぼ完掘した第７号



第 20 図　黒曜石サンプルの採取地点 (サンプリンググリッド)

住居址（曽利Ⅱ式期）で 127.7g である（茅野市教育委員会　2005）。もちろん棚畑遺跡も福沢中原遺跡にしても、今回の駒形遺跡のサンプリングとは取り上げの基準が異なるので「多い」と断言できるわけではない。しかし、およそ 50 立方 cm でこれだけの重量の黒曜石を検出できたということは、駒形遺跡に居住した集団が至近にある黒曜石原産地でより多く黒曜石を入手し消費したという可能性を十分に示唆するものである。中期後半の黒曜石消費について、今回のサンプリング資料の傾向をもとに、今後検討を加えていきたいところである。

さて、もっとも重いサンプリング資料は、N-8-16 である。150.41g を示しており、ほかのサンプルで重量値が大きいものと比べても約 2 倍の値を示している。今回の調査区のなかではもっとも斜面下方（南）に位置し、サンプル深度も南にいくにつれ多くなっていることから、斜面下方に微細な黒曜石の剥片類やそれらを含む土壌が移動して二次的に堆積した結果である可能性が考えられる。同時に、ひとつ北側に位置するサンプリンググリッド N-8-8 の直下には、中越式期の竪穴住居が確認されている。前期前半の竪穴住居出土の黒曜石は、おしなべて中期前半や中期後半に比べて多いことが広く知られているが、N-8-16 グリッドのサンプリング黒曜石の重量は、近在する中越式期の竪穴住居に由来する可能性も考えられる。

一方で、深度 5 や 6 までサンプリングしつつも、サンプリンググリッド I-12-8 や I-13-16、I-3-8、I-13-6、I-13-8 などではそれほど重量値が大きい結果になっていない。それらのグリッドの位置は、おおむね今回のトレンチの交差した付近になる。今回の調査では、それらサンプリンググリッドの下位にも竪穴住居と思われる遺構は確認されておらず、駒形遺跡の時期的な利用変遷に照らしても、竪穴住居の分布域が重なってくる印象がないエリアである。その点で D-13-16 や N-8-8、N-8-16 とは異なっており、今回得たサンプルのデータの違いが駒形遺跡における遺構配置等の利用状況を反映している可能性を示していると考えられる。ただし、重量値が小さいグリッドでも確認面では何らかの遺構プランと思われるものはあり、より慎重に検討をしていく必要はもちろんある。

3　サンプリング資料の点数の目安

本来ならば、これらのサンプリング黒曜石の点数もカウントすべきところであるが、時間的な都合のためにまだカウントが終了していない。ざっと目を通した感じでは多くが微細な剥片であり、剥片剥離やトゥール製作で

第 5 表　黒曜石サンプルの重量

サンプリンググリッド	サンプル深度											合計	深度記録なし
	1	2	3	4	深度4までの合計	5	6	7	8	9	10	11		
D-13-16	32.45	10.86	25.81	8.04	**77.16**								77.16	4.50
D-18-8	25.61	17.46	10.69	5.55	**59.31**								59.31	
D-18-16	17.93	16.46	11.92	12.42	**58.73**	5.10							63.83	4.44
D-23-8	15.39	8.16	15.76	7.28	**46.59**	8.32	7.62						62.53	1.54
D-23-16	7.57	5.17	8.38	9.35	**30.47**	7.41	7.83	0.99					46.70	
I-3-8	10.07	5.48	2.99	3.24	**21.78**	1.04							22.82	
I-3-16	16.42	6.98	3.00	2.33	**28.73**	1.85	0.23						30.81	
I-8-8	28.94	3.92	3.18	8.53	**44.57**	2.36							46.93	
I-8-16	7.02	5.17	6.74	0.00	**19.00**	3.65	8.56	0.56					31.70	
I-11-8	8.22	6.99	10.20	8.45	**33.86**	4.80	2.00						40.66	0.89
I-12-6	5.77	17.51	7.73	4.75	**35.76**	7.33	2.35	1.80					47.24	17.08
I-12-8	4.91	6.16	3.81	5.60	**20.48**	6.47	1.15						28.10	2.25
I-13-6	0.00	6.07	6.98	2.59	**15.64**	9.63	2.05						27.32	
I-13-8 ①	3.58	5.61	6.19	6.68	**22.06**	3.46	2.83						28.35	4.63
I-13-8 ②	3.97	4.76	5.51	9.59	**23.83**	4.76	2.46	1.56					32.61	
I-13-16	7.49	2.77	4.37	3.96	**18.59**	0.00	0.64						19.23	
I-14-6	10.38	11.23	4.28	2.84	**28.73**	7.06	2.82	9.14	4.65				52.4	7.78
I-14-8	19.41	11.07	6.15	2.38	**39.01**	5.78	1.96						46.75	57.48
I-15-6	16.75	17.7	5.85	1.26	**41.56**	0.97							42.53	1.62
I-15-8	12.34	28.07	16.21	7.97	**64.59**	3.23							67.82	3.63
I-18-8	7.75	6.29	5.29	4.57	**23.90**	5.18	3.60	6.76	4.70				41.14	
I-18-16	12.74	6.15	6.35	10.91	**36.15**								36.15	
I-23-8	11.00	5.42	2.25	4.79	**23.46**	4.59	4.01	1.20	1.13				34.39	0.79
I-23-16	4.96	9.52	7.70	8.28	**30.46**	6.48	4.14	5.92	4.29	9.29			60.58	8.75
N-3-16	8.21	3.86	7.49	4.38	**23.94**	3.58	2.18	0.39					30.09	
N-8-8	16.19	7.07	7.80	10.58	**41.64**	7.83	14.71	8.12	6.26				78.56	
N-8-16	19.33	1373	10.59	16.17	**59.82**	17.38	33.71	18.21	13.49	4.10	2.78	0.92	150.41	

生じたものと思われる。

これらのなかで、もっとも重量の軽い I-13-16 のサンプリング資料をカウントした。その結果は第 6 表に示したとおりである。合計で 782 点の資料が含まれていたが、大部分はどの深度でも剥片類となっている。大まかに言って、1g あたり 40 点の資料が含まれている計算になり、これをもとに単純計算すると、直下に住居址がある D-18-16、D-23-8（曽利 III）で約 2500 点、I-3-16、I-8-8（諸磯 b）で 1200 ～ 2000 点程度、N-8-8（中越）で約 3000 点となる。これだけ見れば、剥片類をはじめとして膨大な量の黒曜石が駒形遺跡を覆う土の中に含まれていることになるが、これまで市内の縄文時代遺跡の調査で同様のサンプリング資料を採取したことがないため、今回の駒形遺跡のこのデータがどの程度なのか、まったく判断できない。今後、霧ヶ峰南麓、八ケ岳西南麓と、黒曜石原産地とのかかわりにおいて異なる環境下の遺跡で類似のサンプルを得たうえで論じる必要がある。

なお、カウントを実施した I-13-16 サンプリング資料の注目すべき点として、非黒曜石製の剥片類が合計 30 点含まれていたことがあげられる。これらはチャート製の剥片であるが、霧ヶ峰山麓の縄文時代遺跡にはチャートや珪質岩を用いた石匙やスクレイパーの類に加えて、少数ながらチャート製の石鏃も出土することがある。それら由来のものであろうことは間違いないが、こうした微細な剥片類が確認できるということは、完成品の状態でもたらされたこれらの資料の補修やメンテナンスをおこなっていた可能性が考えられる。

第 6 表　I-13-16 グリッド採取サンプルの組成

	重量	剥片類	二次加工のある石器	両極剥離による剥片	破片（焼けはじけなど）	非黒曜石剥片類	非黒曜石破片	礫	炭化物	合計
深度1	7.49	370		3	15	12	9	5		414
深度2	2.77	76		1		1				78
深度3	4.37	199	1	4	6	13	3	2		228
深度4	3.96	46				4			3	53
深度6	0.64	8		1						9
合計	19.23	699	1	9	21	30	12	7	3	782

4　黒曜石製石器

今回の調査で出土した黒曜石製石器のうち、いわゆるトゥール類は、石鏃 53 点、石鏃未成品 8 点、石錐 2 点、石匙 1 点である。なお、石核 3 点が N-8-16 グリッドからまとまって出土し、黒曜石集積遺構とした。これらについての計測値は、第 7 表に示したとおりである。石鏃の形態を見ると、基部は凹基と平基が見られる。側縁は直線のもの、外反のもの、張り出すように角度を持つものがある。

今回の調査で得られたグリッド一括の黒曜石製石器の重量、また遺構出土一括の黒曜石製石器の重量と点数について、第 8 表に示した。グリッドごとで出土した黒曜石の重量には著しい差があるが、おしなべて調査区南側（斜面下方）のグリッドで出土量が多い。また、調査区北側（斜面上方）でも比較的多く出土している。この傾向は、先に触れたサンプリングでも同様の傾向がある。調査区南側は斜面下方でもあるので、多少は上方から移動してきた黒曜石を含んでいる可能性はあるものの、やはり黒曜石の消費量が多い前期初頭～前半の遺構の影響であろうか。

さて、本来であれば、駒形遺跡の石器製作や石鏃製作の実態について、これら資料及び過去の調査資料を用いて論じるべきであるが、今回の報告ではそれについて議論できるだけの十分な材料を用意できていない。

ここでは、将来的に駒形遺跡の通時的な黒曜石利用の実態を論じるための予備的な資料操作として、第 6 次調査（長野県埋蔵文化財センター　2007）の資料を用いて駒形遺跡における黒曜石消費の規模について、考えてみたい。

これまで、再三駒形遺跡が黒曜石供給の拠点になったとの評価を示してきた。それは、霧ヶ峰南麓に立地する遺跡では、たとえば高風呂遺跡、上の平遺跡、一ノ瀬・芝ノ木遺跡、棚畑遺跡など黒曜石集積遺構が確認されている遺跡が多いことは冒頭でも紹介したが、これらのなかでも、表面採集によって得られた石鏃の数量が飛びぬけて多いことによる印象が影響していると思われる。それは田実文朗氏のコレクションが示しているが、それ以外の資料も含めると、今日までの表面採集による石鏃数は 5 万点を超えるほどである。そして、県道諏訪茅野線

第７表　黒曜石石器（トゥール類）の計測値

No.	器種	出土位置	長	幅	厚	重量	欠損部位
1	石鏃	焼土6	2.11	1.72	0.69	1.8	
2	石鏃	焼土6	1.95	1.57	0.38	1.2	
3	石鏃	焼土7	2.08	1.54	0.75	1.7	脚部
4	石鏃	D-13-16	1.57	1.36	0.39	0.5	
5	石鏃	D-13-16	1.71	1.41	0.44	0.7	
6	石鏃	D-18-4	1.64	1.38	0.29	0.6	側縁
7	石鏃	D-18-4	1.56	1.31	0.37	0.8	先端 脚部
8	石鏃	D-18-12	1.67	0.97	0.40	0.5	両脚部
9	石鏃未成品	D-18-12	2.03	1.95	0.59	2.1	
10	石鏃未成品	D-18-12	1.57	2.07	0.47	1.2	先端
11	石鏃未成品	D-18-12	2.36	1.30	0.64	1.9	
12	石鏃	D-18-16	1.94	1.45	0.47	0.8	
13	石鏃	D-18-16	2.20	1.27	0.26	0.8	
14	石鏃	D-18-16	1.55	1.39	0.38	0.6	先端 脚部
15	石鏃	D-23-16	1.51	1.39	0.28	0.5	脚部
16	石錐	I-3-8	2.52	1.05	0.40	0.9	基部
17	石鏃	I-8-4	1.66	1.44	0.54	1.1	両脚部
18	石鏃	I-11-7	2.62	1.70	0.54	1.8	
19	石鏃	I-11-8	1.58	1.00	0.24	0.3	脚部
20	石鏃未成品	I-12-6	2.46	2.92	0.82	6.8	
21	石鏃	I-13-8	2.04	1.69	0.53	1.4	両脚部
22	石鏃	I-14-5	1.44	1.01	0.36	0.4	先端 脚部
23	石鏃未成品	I-15-8	2.00	1.83	0.38	1.4	
24	石鏃未成品	I-18-16	2.53	1.77	0.64	2.6	
25	石鏃	I-18-16	2.08	1.25	0.27	0.5	先端 両脚部
26	石鏃	I-23-12	2.00	1.47	0.32	0.6	
27	石鏃	I-23-12	2.53	1.17	0.41	0.8	脚部
28	石鏃	I-23-12	1.43	1.81	0.29	0.8	先端
29	石鏃	I-23-12	1.04	1.42	0.28	0.5	先端
30	石匙	I-23-12	2.33	4.73	1.25	7.3	
31	石鏃	I-23-16	2.59	1.56	0.40	0.9	
32	石鏃	I-23-16	2.02	1.32	0.29	0.5	
33	石鏃	N-3-4	2.12	1.55	0.44	1.2	脚部
34	石鏃	N-3-4	2.15	1.30	0.28	0.7	両脚部
35	石鏃	N-3-4	1.76	1.07	0.23	0.4	先端 脚部
36	石鏃	N-3-4	1.60	1.16	0.32	0.3	脚部
37	石鏃	N-3-4	1.52	1.35	0.32	0.4	脚部
38	石鏃	N-3-4	2.00	1.73	0.69	1.7	脚部
39	石鏃未成品	N-3-4	3.77	1.69	0.90	5.4	
40	石鏃	N-3-12	1.87	1.53	0.38	0.7	
41	石鏃	N-3-12	2.12	1.70	0.51	1.4	先端 脚部
42	石鏃	N-3-16	1.77	1.87	0.50	1.3	先端
43	石鏃	N-3-16	2.29	1.71	0.40	1.1	脚部
44	石鏃	N-8-4	2.54	1.67	0.52	1.7	両脚部
45	石鏃	N-8-8	1.98	3.07	0.71	4.1	先端
46	石鏃	N-8-8	2.38	1.46	0.42	1.1	
47	石鏃	N-8-8	1.96	1.26	0.34	0.4	
48	石鏃	N-8-8	1.60	1.46	0.38	0.5	
49	石鏃	N-8-8	1.36	1.66	0.46	0.8	
50	石鏃	N-8-8	1.45	0.98	0.27	0.4	脚部
51	石鏃	N-8-8	1.90	1.20	0.38	0.5	脚部
52	石鏃	N-8-8	1.45	1.42	0.38	0.6	脚部
53	石鏃	N-8-8	2.03	2.14	0.40	1.3	先端
54	石鏃未成品	N-8-8	2.21	2.07	0.46	2.0	先端
55	石鏃	N-8-12	1.74	1.86	0.37	0.8	先端
56	石鏃	N-8-12	1.54	1.52	0.38	0.6	先端 脚部
57	石鏃	N-8-16	2.16	1.46	0.42	0.9	
58	石鏃	N-8-16	1.97	1.75	0.44	1.3	先端
59	石鏃	N-8-16	2.44	1.45	0.34	1.0	両脚部
60	石鏃	N-8-16	2.60	1.60	0.49	1.3	脚部
61	石鏃	N-8-16	0.90	1.61	0.33	0.4	先端
62	石鏃	N-8-16	1.42	0.96	0.35	0.4	脚部
63	石鏃	N-8-16	1.82	1.13	0.30	0.7	両脚部
64	石錐	N-8-16	3.17	1.04	0.66	1.9	
65	石核	No.1 集積	2.84	6.94	2.27	30.3	
66	石核	No.2 集積	4.86	5.00	2.54	55.7	
67	石核	No.3 集積	2.40	5.42	3.10	40.6	
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)	

の調査によって検出された前期前半中越式期の集落から検出された黒曜石石器群の出土量もかなり多いような印象がある。

では、駒形遺跡出土の黒曜石製石器群が同一時期のほかの遺跡とどの程度の規模の差を持つのだろうか。実はこれまでに具体的に比較したことがあまりない。そこで、今回の調査の目的とは時期が異なるが、前期前半の駒形遺跡の住居址から出土した黒曜石製石器群と、八ヶ岳山麓における同時期の集落遺跡の一例である阿久尻遺跡の住居址から出土した黒曜石製石器群を比較して、一つの目安になるようにしておきたい。

比較にあたっては、時間的な制約もあり総重量のみでの比較とした。また、阿久尻遺跡は確認面での住居址の遺存度に差があるものの 1993 年報告時（茅野市教育委員会　1993）の全住居址を計測した。駒形遺跡の住居址については、ほかの住居址との切り合いが原則なく、住居址以外の遺構が重ならない住居址を優先的に選択して計測をおこなった（第 21 図）。具体的には、SB37、SB38、SB42、SB46 ～ SB50、SB54、これにサイズの大きい原石が出土した SB69 を加えた、合計 10 の住居址を対象とした。

これによると、阿久尻遺跡では C10 住がもっとも多く 1500g を超える規模であった。次いで C11 住が 1300g オーバー、そして C9 住が 1000g オーバーとなった。これ以外はいずれも 1000g 以下であり、特に斜面地に築かれた C17 住から C23 住は 100g にも満たない程度の出土量であった。斜面地ではないにもかかわらず、A 地区にも 100g にも満たない程度しか黒曜石が出土しなかった住居址がある。A16 住以外は、プランもはっきりと

第８表　グリッド一括黒曜石の重量および遺構一括黒曜石の重量と点数

グリッド	重量（g）	石鏃数
D-13-16	153.04	2
D-18-4	148.27	2
D-18-8	145.95	
D-18-12	110.12	4
D-18-16	179.73	3
D-23-4	134.47	
D-23-8	41.42	
D-23-12	17.05	
D-23-16	10.73	1
I-3-4	41.47	
I-3-8	45.99	
I-3-12	48.59	
I-3-16	37.61	
I-8-4	66.74	1
I-8-8	55.54	
I-8-12	48.19	
I-8-16	24.32	
I-11-7	154.54	1
I-11-8	73.73	1
I-12-5	135.36	
I-12-6	79.59	1
I-12-7	88.77	
I-12-8	55.68	
I-13-4	22.48	
I-13-5	19.03	
I-13-6	24.33	
I-13-7	31.69	
I-13-8	12.30	1
I-13-12	11.56	
I-13-16	81.85	
I-14-5	21.50	1
I-14-6	55.30	
I-14-7	143.74	
I-14-8	137.67	
I-15-5	49.63	
I-15-6	12.58	
I-15-7	36.52	
I-15-8	32.15	1
I-18-4	87.46	
I-18-8	139.46	
I-18-12	81.99	
I-18-16	119.77	2
I-23-4	112.08	
I-23-8	151.94	
I-23-12	125.85	4
I-23-16	337.38	2
J-11-5	17.45	
N-3-4	601.02	7
N-3-12	152.74	2
N-3-16	482.78	2
N-8-4	262.15	1
N-8-8	715.72	10
N-8-12	793.27	2
N-8-16	872.22	7
表面採集	133.16	
合計	7775.67	58

遺構名	重量（g）	点数	石鏃数
1号住居址（105号住居址）	80.26	45	
2号住居址（106号住居址）	50.28	17	
3号住居址（107号住居址）	31.00	11	
1号土坑	28.26	8	
4号土坑	9.12	9	
1号焼土址	2.36	1	
2号焼土址	3.20	1	
3号焼土址	8.92	6	
4号焼土址	0.43	1	
5号焼土址	54.19	14	
6号焼土址	10.73	8	2
7号焼土址	9.61	4	1
1号屋外埋甕	1.15	1	

重量合計	289.51

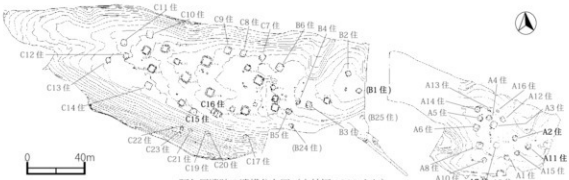
とらえているから、そもそも少ないということであろう。

これに対して、駒形遺跡の今回対象とした住居址を見ると、もっとも少ないのがSB38で176.1gだが、次に少ないのがSB37の665.1g、その次に少ないのがSB49で961.5gであった。残る７つの住居址はいずれも1000gを超えており、最多はSB48の7551.8gとなっている。第21図には示さなかったが、SB41（SB39、SB40と部分的に重なる）からは8000gを超える重量の黒曜石が出土しており、阿久尻遺跡と比較すると、駒形遺跡の住居址出土黒曜石は実に多いという印象を抱かずにはいられない。ちなみに、阿久尻遺跡の住居址出土黒曜石の重量を合計してみると、A地区で5923.5g、B地区で1225.8g、C地区で8416.2gとなり、あたかも駒形遺跡の住居址ひとつが阿久尻遺跡の地区単位での黒曜石出土量に相当するかのようである。

阿久尻遺跡は、地形的に見てもこれ以上の遺跡の広がりを想定する必要はなさそうであるが、駒形遺跡はこれでも一部の調査であり、この点をみるといっそう駒形遺跡における多量の黒曜石消費があったと思わせる。

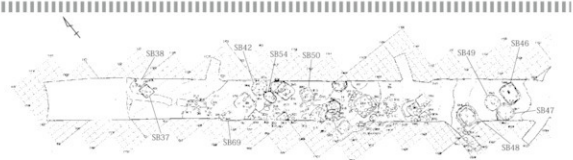
もっとも、この現象が駒形遺跡にだけ特有のものであるか、ということになると、簡単には決められない。例えば高風呂遺跡では、前期初頭～前半という同時期の可能性のある黒曜石原石の集積遺構が住居址内から見つかっている（茅野市教育委員会1986）。原石サイズはかなり大きく、また出土黒曜石の量も確かに多い印象がある。高風呂遺跡の前期の住居址は中期などの住居址と重複しているため、駒形遺跡第６次調査や阿久尻遺跡の住居址出土資料と同じような石器群という枠組みを与えることが難しいが、集積原石や残滓類の重量のいずれを見ても、阿久尻遺跡との間に黒曜石製石器の出土量に差が確かにある。おそらく、遺跡間というよりは霧ヶ峰山麓と八ヶ岳山麓の間という地区的な違いであろうと予測できる。今後、ほかの遺跡も含めて検討していきたい。

ところで、黒曜石サンプルのところでも触れたように、D-13-16、D-8-8、D-8-16などのグリッドのサンプリング資料は中期後半の環状集落の住居址分布範囲に該当するところであり、中期後半における茅野市内の各遺跡の住居址出土黒曜石と比較して、思いのほか重量があるという印象を抱く出土量であったことは先に述べた。これについても今後検討をしていく必要があるが、もしこの見通しとおりであれば、駒形遺跡が縄文時代早期から



阿久尻遺跡の遺構分布図（小林編 1993 より）

	A区			B区		C区	
		総重量	備考		総重量		総重量
						10号住	1517.7
1000.1g～						11号住	1388.3
						9号住	1087.9
	3号住	932.4		6号住	605.8	14号住	971.3
	8号住	876.0				15号住	671.9
500.1～	1号住	684.2				12号住	593.9
1000.0g	6号住	616.4	剥離面での接合資料3組あり			8号住	540.8
	5号住	598.4					
	13号住	569.6					
	7号住	443.8		3号住	263.3	13号住	499.2
100.1～	10号住	369.8		5号住	212.1	7号住	487.4
500g	2号住	313.2		2号住	114.2	24号住	319.8
	12号住	196.7				16号住	102.4
	14号住	122.7					
	11号住	75.2		4号住	30.4	21号住	71.6
	9号住	69.6				17号住	56.8
～100.0g	4号住	34.6				23号住	40.2
	16号住	19.9				19号住	36.4
	15号住	1.0				20号住	21.2
						22号住	9.4



駒形遺跡の遺構分布図（第 6 次調査）

	住居址No.	総重量	石鏃（未成品含）	スクレイパー	石匙	石錐	扶入石器	両極石器	加工痕のある剥片	石核・原石	剥片類	非黒曜石製の剥片
	SB48	7551.8	57	32	14	8		75	53	105	1029	8
	SB69	4566.1	28	27	4	4	1	41	19	74	840	6
	SB47	4284.1	13	10	3	2	2	32	37	83	536	10
1000.1g～	SB50	3760.4	46	25	3	9		53	36	48	1119	12
	SB42	3529.7	33	12	3	3		42	40	56	1077	4
	SB54	3144.3	13	12	1	2	1	47	19	37	776	4
	SB46	1477.9	8	3		1		17	6	18	283	1
500.1～	SB49	961.5	7	3	1	3		6	5	12	85	4
1000.0g	SB37	665.1	6	3		1		4	6	10	265	2
100.1～												
500g	SB38	176.1	6					1	3	4	87	

（小林・贄田 2007 より。剥片類以外の点数には非黒曜石製資料を含む）

第 21 図　阿久尻遺跡と駒形遺跡住居址出土黒曜石の重量データ（前期初頭～前期前半）

後期にかけて断続的に利用されるあいだ、黒曜石の入手と石器製作に大きな役割を複数の時期で同じように果たしていた可能性がひときわ高くなる。今回は時間的な都合のためこれ以上の議論はできないが、前期前半だけでも相当に黒曜石消費の規模が大きいことが確かめられたので、引き続き、同じ時期における住居址出土黒曜石の出土量や重量の比較をして、駒形遺跡の黒曜石消費の実態が少しでも明らかになるよう努めたい。

第４章　調査のまとめ

1　調査遺構の検討

今回の調査で確認された最も早い時期の遺構は、縄文早期末の条痕文系土器を伴った第８号焼土址である。地床炉状の形態であるが、周辺に床等の遺構が確認されなかったので、住居址とは関係しない屋外の単独施設と考えられる。

前期では引き続いて第８号焼土址付近に遺構の集中域が認められる。同焼土址付近は駒形遺跡の乗る台地の南肩部で、地形が下段の平地である扇状地の扇端部へ向かって傾斜していく地形上の変換点となる場所である。ここでは同焼土址の西側近くから前期初頭の尖底深鉢とみられる土器が出土しており、その南側に接する遺構８と第 107 号住居址は前期前葉の遺構である。今回の調査区で黒曜石の出土量が多かったのはこの区域であり、遺跡の中での地形上の性質を考慮するとしても、黒曜石量の多さはこの時期の遺構の集中と関係があると考えられる。一方、この区域を北側に離れたⅠ-14-8 の第１号焼土址と、これに接する遺構３も同期の遺構と考えられる。両遺構は台地の平坦部となる場所での発見である。周辺で住居址が確認されず、住居址とは異なる遺構が発見されたことは、後述する前期前葉の集落構成をみていく上に大事な成果であったといえる。

前期後半では諸磯ｂ式期の第 106 号住居址が確認された。規模は明らかでないが、径５ｍ程度の円形プランの住居址になると思われる。部分的な精査で出土遺物もほとんどないため詳細は明らかでないが、時期の確定できたことは幸いであった。このほか、諸磯ｃ式期の土坑状を呈する遺構９がある。

中期前半期の遺構は、井戸尻式の深鉢を出土した第６号焼土址下に位置する第６号土坑がある。またその南５ｍの位置に土坑状の遺構７がある。いずれも駒形遺跡の乗る台地の南肩部である。焼町類型など井戸尻式期の土器は発掘区からも出土しているが、遺構として調査・確認できたのは以上の２箇所である。

中期後半にはこれまでの調査から環状集落の存在が推定されており、今回の調査はその広場の存在を捉えるために計画された。今回の調査で明らかとなった同期の遺構は第 105 号住居址、第１・４号土坑、屋外埋甕、遺構１・２・４・５・６がある。このうち性格の明らかでない遺構１・２・４・５・６は住居址と異なる土坑状の遺構である。これに加え、第２号土坑も中期後半の遺構ではないかと考えられる。

第２号土坑は伴った遺物の大形石棒の特徴から中期とみられるものの、細かな時期は特定できない。また、伴出した板状安山岩の礫器は、高風呂遺跡では藤内Ⅰ式期 14 号・曽利Ⅰ式期７号、棚畑遺跡では中期初頭 40 号・貉沢式期 103・147・156・157 号・藤内Ⅰ式期 119・142 号・曽利Ⅰ式期 105 号・曽利Ⅱ式期 15・19・23・98 号・曽利Ⅲ式期 138 号、上の平遺跡では曽利Ⅳ式期 29 号の各住居址に出土例があり、中期のほぼ全期間に認められる。そこで、中期内での時間的な位置づけを駒形遺跡の集落変遷上から推察してみたい。後述のように、駒形遺跡の中期の集落変遷では国史跡北端部に営まれていた新道式期から藤内式期までの集落が、第２号土坑の位置する台地平坦部に移って集落を営むようになるのは井戸尻式期以降であり、中期後半には本格的な環状集落が形成されたとみられている。よって、藤内式期までの集落から距離を置く、中期後半の環状集落の広場に位置する第２号土坑は、中期内でも後半期の年代観を想定できるものと思われる。そうとすれば、配石遺構も中期後半の可能性が考えられるが、ここではその可能性の指摘にとどめたい。

後期の遺構は土器の伴った第５･７号焼土址があり、堀之内１式期とみられる。第５･７号焼土址付近には第２･３･４・６号焼土址も検出されている。いずれも第３層に位置している。第２号焼土址には前期の土器が伴っているものの、第３・４・５・６・７号焼土址との層位的関係、また調査区内での分布と焼土址間の位置関係などを評価し、第２号焼土址は周辺の焼土址と同様の後期の遺構と捉えておきたい。

2　調査成果からみた駒形遺跡の集落変遷

今回確認された遺構を、これまでの調査成果に位置づけ、各期の集落のあり方を見てみたい（第 22・23 図）。

(1) 早期後半

駒形遺跡では押型文・沈線文系・条痕文系土器が出土しているものの、これらの土器に伴う住居址は未確認である。しかしながら第 12 次調査において、台地の西側斜面の谷地形に設定された第 1・2・3・4 号試掘溝の所見から、早期後半の集落については台地上方の平坦部に存在する可能性が指摘されている。今回の調査はその台地平坦部である。設定されたトレンチでは住居址の発見に至らなかったものの、第 8 号焼土址の発見により、集落の存在する蓋然性は高まったと考えられる。

(2) 前期前半

今回の第 107 号住居址の発見で、住居址は史跡指定地である台地の平坦地に 1 軒が加わって 15 軒となり、台地下の平坦地 50 軒とで 65 軒が発掘、確認されたことになる。史跡指定地である台地平坦地における住居址の分布は、第 107 号住居址の発見で台地周縁の緩斜面を中心に展開する状況がより鮮明になったといえる。一方で、平坦地の北側に分布する一群との分布上の差異が明確になってきたともいえる。今回発見された第 1 号焼土址はその両者の中間となる住居址未確認の空閑地に位置している。台地平坦地での集落構成を明らかにしていく上で、住居址とは異なる遺構の確認された空閑地と、この区域を挟んで南北に分布する住居址群の関係を捉えることは、今後の集落研究上の課題となろう。

(3) 前期後半

これまで、前期後半の諸磯 a・b 式期の住居址は、駒形遺跡と周辺の大田刈遺跡、大六殿遺跡からは未発見であった。それでも諸磯 a 式期の住居址に限っては、霧ヶ峰南麓の遺跡では数軒程度が発掘されている。しかしながら諸磯 b 式期の住居址は、上の平遺跡、よせの台遺跡、一ノ瀬遺跡、棚畑遺跡などで土器の出土例はあるものの、霧ヶ峰南麓を含む茅野市の位置する八ヶ岳西山麓一帯では未発見であった。今回確認できた第 106 号住居址は、詳細は明らかでないとしても、これまで空白であった駒形遺跡の前期後半期を埋める資料であり、かつ、広く八ヶ岳西山麓の縄文時代史に貴重な資料を提供したといえよう。

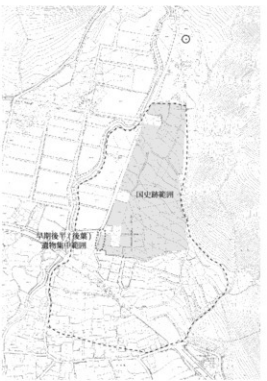
続く諸磯 c 式期には遺構 9 がある。諸磯 c 式期の住居址は大田刈遺跡、大六殿遺跡から発見されているが、今回の遺構 9 と前述の第 106 号住居址の発見で、駒形遺跡では諸磯 b 式期から諸磯 c 式期にかけての集落が、今後明らかになる可能性が出てきたと考える。

(4) 中期前半

これまでに遺跡の北側と南側に離れて 8 軒の住居址が確認されている。国史跡北端部となる北側の 7 軒は新道式期から藤内式期の住居址で、南側の 1 軒は井戸尻式期の第 86 号住居址である。こうした住居址の分布から、中期後半の環状集落は北側の集落の南側への移動により、井戸尻式期に形成が始まるとみられている。今回の調査では南北トレンチの南側から井戸尻式期とみられる第 6 号土坑と遺構 7 が確認された。第 86 号住居址とは 40 m程度の至近の位置である。わずか 2 基の土坑ではあったものの、北側の集落とは異なる、南側に展開する中期前半集落に関する、住居址付近に設けられた遺構の存在を確認することができた。

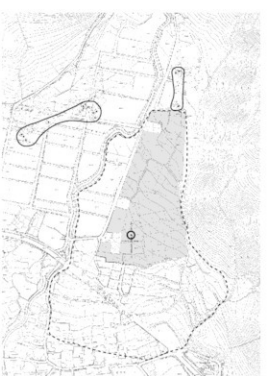
(5) 中期後半

今回の調査の目的は、台地中央部で確認されている 15 軒の住居址の広がりから存在が予測される環状集落の把握であった。今回の調査では第 105 号住居址が南北トレンチの北端近くに検出された以外、中期後半の住居址は確認されていない。これまでの調査成果と合わせてみると、中期後半の住居址は今回の調査トレンチの外縁部に位置している。一方で、今回トレンチの全域で確認された遺構は柱穴や土坑状の遺構である。残念ながらそれらの遺構のほとんどについて時期や性格を特定できていないが、精査した一部の土坑や屋外埋甕などから、多くが環状集落の広場に設けられた遺構と考えられる。よって、今回の調査区を広場とし、これを取り巻くように住居域が展開する中期後半の環状集落の存在は確定できたと考える。ただしこの場合、今回の調査区から北へ 100 mほど離れた位置にある第 4 次調査 S トレンチの第 30 号住居址は、並存する別のグループに属す可能性が考えられる。



早　期

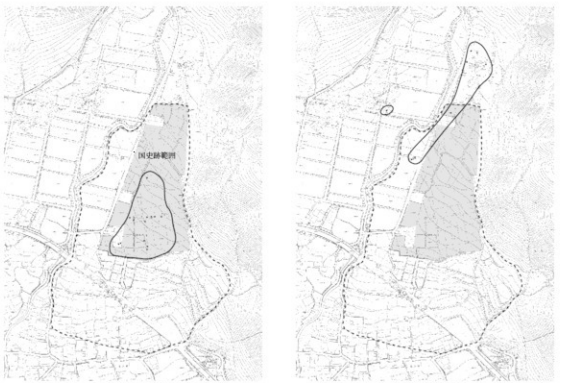
前期前半



前期後半

中期前半

第 22 図　駒形遺跡集落変遷図 (1)



第 23 図　駒形遺跡集落変遷図 (2)

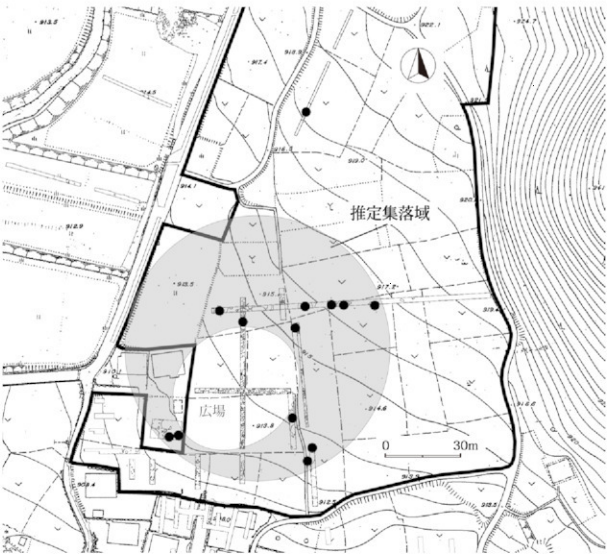
(6) 後期

後期の集落については、これまでの遺跡内の北側と西側を主とする調査地点での成果から、遺跡の西側斜面に直行する谷地形や桧沢川に沿った扇状地の扇央部にかけての微地形に、敷石住居址と墓坑・配石が組み合わさる構造の単位が複数存在して構成されると予測されている。一方、台地南側の平坦部においても、堀之内式期とされる配石址の確認から、後期前半には中期後半の集落に重なる遺構群が存在し、全体として中期後半の集落範囲を超える広がりの規模をもつことが想定されている。

今回確認された焼土址群は台地南側の平坦部に位置しており、第 4 次調査で確認されている配石址と同期の遺構である。配石址が平坦部の中央に位置し、焼土址群は台地の肩部であり、性格の異なる遺構が広い台地上で場所を違えて設けられている。今回確認された焼土址群だけをみると、各焼土址の規模や等間隔に近い位置的関係など、焼土址群の背景には何らかの集団関係が想定される。いずれにしろ両者は中期後半の環状集落の位置にある。これらの遺構を視点にこれまでの調査から考えられている後期の集落観を検討してみると、焼土址群と配石址の設けられた中期後半以来の伝統的な場の周囲の微地形となる場所に、周辺遺跡を含め、一定の構造を持つ単位が分散的に広がっているという図式として理解される。

3　環状集落の構成と広場の性格

これまでに確認されている中期後半の住居址は、北側では今回の第 105 号とその近くに位置する第 4 次調査 E トレンチ西端の第 14 号がある。これに続く北東部には第 4 次調査 E トレンチの第 6・7・8・10 号と、第 4 次調査 T トレンチ北端の第 31 号がある。西側では第 10 次調査区において第 88・89 号が確認されている。東側は今回の東西トレンチの東端となる J-12-5 の東側 5m ほどに位置する第 4 次調査 T トレンチの中央部付近に存在が推定されるものの、未確認である。しかしながらこの位置に確認された後期の配石址は中期の住居址と重複しているので、この配石址下の住居址は中期後半の可能性が高いとみられる。東南部には第 4 次調査 F(2) トレンチ第 16 号、F(3) トレンチ北側の第 19・20 号が位置している。南側では今回の調査トレンチ、及び第 4 次調査



第 24 図　縄文中期後半の環状集落想定図 (1/1,500)

F(3) トレンチ南半、第 12 次調査 7 号試掘溝において確認されていない。よって、南側では各トレンチ間になお若干の未調査部を残すものの、中期後半の住居址分布は薄いものと思われる。

こうした住居址分布の状況から、環状集落を構成する住居域の広がりと、住居域の内側となる集落中央部の広場の位置を想定してみたい (第 24 図)。まず、住居域については、東側では住居址分布の外側に位置する第 4 次調査 E トレンチ第 6 号、東南部では第 4 次調査 F(3) トレンチ第 19・20 号が外縁に想定される。南西部では第 10 次調査区に第 88・89 号があり、その周辺に設定された第 12 次調査区では確認されていない。そこで、限定的な分布状況ではあるものの、これらの住居址を住居域の外縁に位置する住居址とみると、大変粗い想定となるが、110 × 110 m 程度の円形の広がりが住居域の外縁になると思われる。この住居域を後述する広場との位置関係で見ると、住居域は北側から東側が広く、南側は比較的狭い。住居域の狭い南側は住居址の分布が薄いので、集落は南側に出入口部の開いた形態が考えられる。

一方、集落の広場については、住居址分布の内側に位置する今回の第 105 号、第 4 次調査 T トレンチ北端の第 31 号、第 4 次調査 T トレンチ中央部付近の配石址下の住居址、第 4 次調査 F(2) トレンチ第 16 号、第 10 次調査区の第 89 号を経るラインで示される、50 × 40 m 程度の楕円形の空間が想定される。この広場は、台地平坦部の中央を南西方向へ伸びてくるわずかな尾根状の高まりに位置している。広場の位置する地形に続く南側は今回トレンチの位置する場所であり、付近は南側から入り込んだ浅い谷地形である。集落の南側の出入口部が、

広場に続く浅い谷地形にあったことも考えられる。

広場については、トレンチの全域で確認された遺構の多くについて時期や性格を特定できていないものの、精査した一部の土坑や屋外埋甕などから性格をうかがうことは可能かと思われる。それらの遺構は曽利Ⅳ式期の土器埋設遺構を伴う土器棺墓とみられる第４号土坑、曽利Ⅴ式期の屋外埋甕、墓坑の可能性のある遺構１・２・４・５・６である。また、中期後半と考えられる第２号土坑を調査することができた。同土坑は石棒を祭祀儀礼によって埋設した遺構と考えられる。こうした遺構のあり方から、広場は墓域と祭祀の空間であったと推察される。

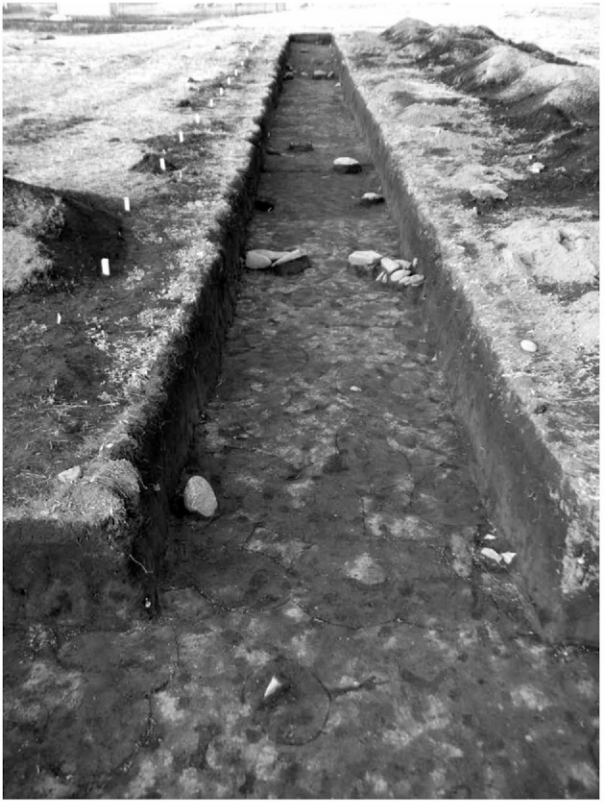
さて、霧ヶ峰南麓の中期後半の環状集落で集落の規模が捉えられる遺跡は上の平遺跡、駒形遺跡、棚畑遺跡である。３遺跡は霧ヶ峰南麓米沢の枢要部となる土地への東側出入り口部に上の平遺跡、その中心地に駒形遺跡、西側出入り口部に棚畑遺跡が位置する関係にある。また、この３遺跡が占地する地点は、霧ヶ峰南麓を下る河川沿いに開かれた、霧ヶ峰の黒曜石原産地と米沢の枢要部を結ぶ、主要な黒曜石運搬ルートのそれぞれの入口部となる場所である。こうした関係にある３遺跡の中期後半の環状集落の規模は、上の平遺跡 100 × 70 m、広場 40 × 35 m、駒形遺跡 110 × 110 m、広場 50 × 40 m、棚畑遺跡南環 110 × 80 m、広場 40 × 35 mほどの大きさである。上の平遺跡では中期後半の住居址は 29 軒を調査し、なお未発掘の多くの住居址が保存されている。棚畑遺跡での中期後半の住居址は 83 軒、その内南環の住居址は 63 軒である。駒形遺跡では今のところ 16 軒が確認されているが、枢要部の中心地で、しかも前二遺跡以上に広く平坦な地形に占地している。また、環状、広場の規模ともに大きいことから、駒形遺跡は上の平・棚畑遺跡以上の数の住居址が営まれた最大規模の拠点集落と考えられる。霧ヶ峰産黒曜石の集散地である霧ヶ峰南麓における中心的な拠点集落と評価される駒形遺跡の性格が、中期後半の環状集落の規模に表れているものと理解したい。

引用・参考文献

・下諏訪町教育委員会 2001『黒曜石原産地遺跡分布調査報告書 － 和田峠・霧ヶ峰 － 』
・下諏訪町教育委員会 2008『黒曜石原産地遺跡分布調査報告書Ⅱ － 星ヶ塔遺跡 － 』
・大工原豊 2007「黒曜石交易システム － 関東・中部地方の様相 － 」『縄文時代の考古学 6』同成社
・茅野市 1986『茅野市史』上巻
・茅野市 1986『茅野市史』別巻 自然
・茅野市教育委員会 1978『よせの台遺跡 - 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 -』
・茅野市教育委員会 1986『高風呂遺跡 - 昭和 59 年度県営圃場整備事業湯川地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 -』
・茅野市教育委員会 1990『棚畑 - 八ヶ岳西山麓における縄文時代中期の集落遺跡 -』
・茅野市教育委員会 1993『阿久尻遺跡 － 県営金沢工業団地建設に伴う造成工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 － 』
・茅野市教育委員会 1995『上の平遺跡 - 平成 6 年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
・茅野市教育委員会 2001『一ノ瀬・芝ノ木遺跡 - 平成 8 年度・9 年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概要報告書 -』
・茅野市教育委員会 2001『大田苅遺跡 - 平成 11・12 年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 -』
・茅野市教育委員会 2002『大六殿遺跡 駒形遺跡 - 県営は場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 -』
・茅野市教育委員会 2005『中原遺跡 － 工場増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 － 』
・茅野市教育委員会 2011『市内遺跡 5 －平成 21・22 年度 埋蔵文化財発掘調査報告書－』
・茅野市教育委員会 2012『市内遺跡 6 －平成 22・23 年度 埋蔵文化財発掘調査報告書－』
・茅野市教育委員会 2013『駒形遺跡 - 平成 23・24 年度保存目的のための確認調査報告書 -』
・茅野市教育委員会 2015『市内遺跡 8 －平成 25 年度 埋蔵文化財発掘調査報告書－』
・長野県教育委員会 1997『大規模開発事業地内遺跡 - 遺跡詳細分布調査報告書 -』
・長野県埋蔵文化財センター 2007『駒形遺跡』『県道諏訪茅野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書』
・宮坂虎次 1983「駒形遺跡」『長野県史』考古資料編 全一巻（二）主要遺跡 (南信)』長野県史刊行会
・宮坂英弋 1961「縄文早期遺末の住居址 －茅野市駒形遺跡出土－」『信濃 Ⅲ 13-8』
・宮坂英弋 1966「長野県茅野市駒形遺跡」『日本考古学年報 14』日本考古学協会
・望月明彦 2007「第 6 章自然科学分析第 4 節 黒曜石産地同定分析」『駒形遺跡 県道諏訪茅野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書』
・米沢考古学クラブ 1973『古道－霧ガ峰南部における先史時代の黒曜石運搬ルートと考えられる古道の調査－』

1　南北トレンチ北（北から）

図版 2



1　南北トレンチ北 (南から)

1　東西トレンチ西 (西から)

図版４

1　東西トレンチ西（東から）

2　東西トレンチ東（西から）

3　東西トレンチ東（東から）

4　南北トレンチ南（北から）

1　南北トレンチ西 (南から)

2　南北トレンチ東 (南西から)

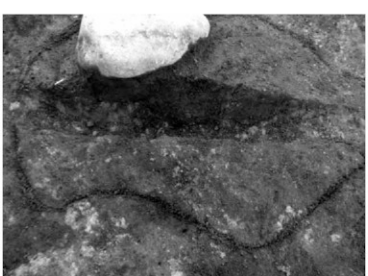
3　南トレンチ東 (南から)

4　105 号住居址 (南から)

図版 6

1　105 号住居址埋甕

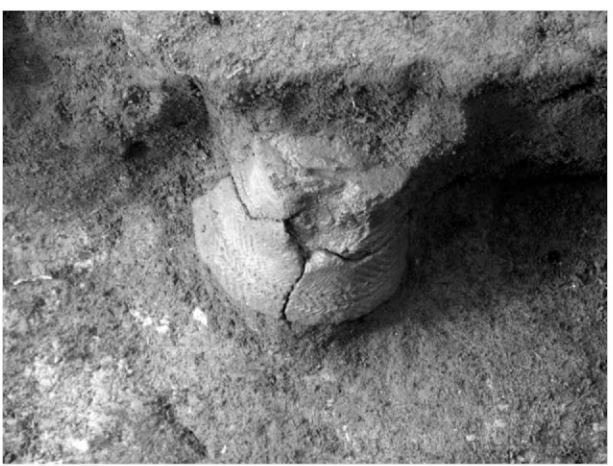
2　105 号住居址埋甕



3　105 号住居址内焼土址半裁

1　106 号住居址（南から）

4　106 号住居址（南から）



3　106 号住居址出土土器

図版 8

1　107 号住居址 (東から)

2　1 号土坑 (東から)

3　1 号土坑半裁 (南西から)

1　2号土坑(西から)

2　2号土坑(西から)

3　3・4・5号土坑(北から)

図版 10

1　4号土坑半裁（東から）

2　4号土坑（北から）

3　4号土坑（北から）

1　3・4・5 号土坑完掘（北から）

2　6 号土坑（西から）

3　屋外埋甕（東から）

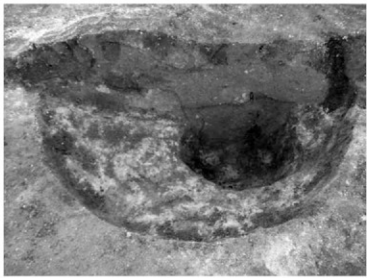
図版 12

1　屋外埋甕（東から）

2　屋外埋甕半裁（東から）

3　2号土坑と集石遺構（西から）

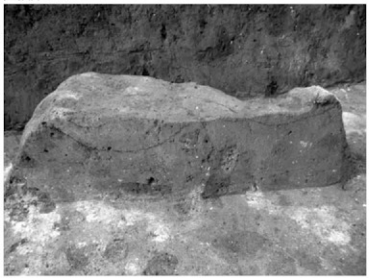
1　集石遺構（東から）



2　1 号焼土址（北から）

3　2 号焼土址（西から）

図版 14



1　2号焼土址半裁

2　3号焼土址・遺構 5(西から)

3　3号焼土址

1　4 ～ 6 号焼土址 (西から)

2　4 号焼土址

3　5 号焼土址

図版16

1　6号焼土址

2　7号焼土址

3　8号焼土址

1　黒曜石集積

2　遺構 4(南から)

3　遺構 8・9(東から)

図版 18

1　作業風景

2　作業風景

3　作業風景

1　作業風景

2　作業風景

3　作業風景

図版 20

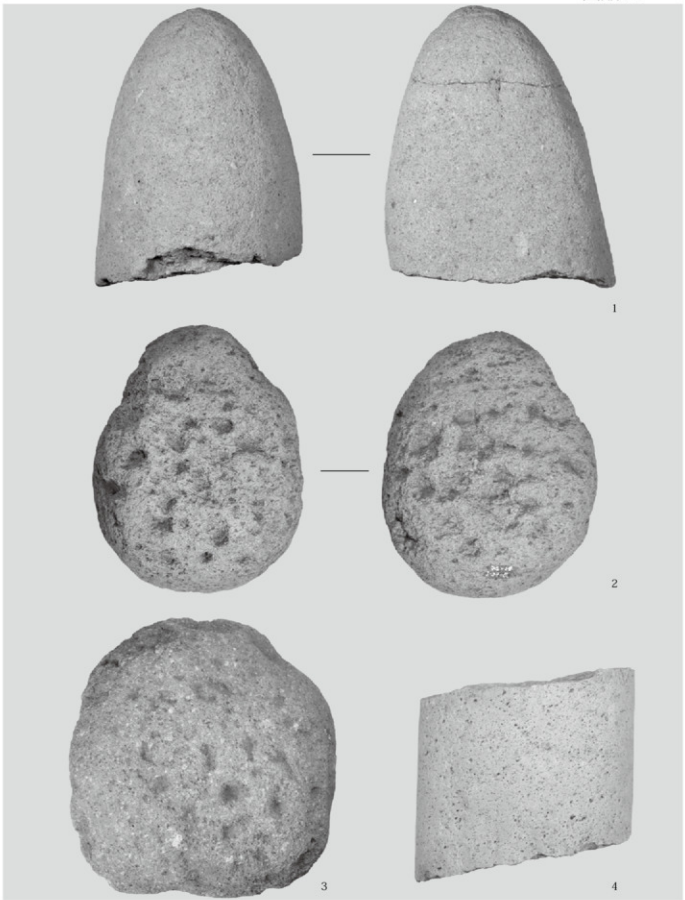
1　現地説明会（12 月 20 日開催）

2　現地説明会（12 月 20 日開催）

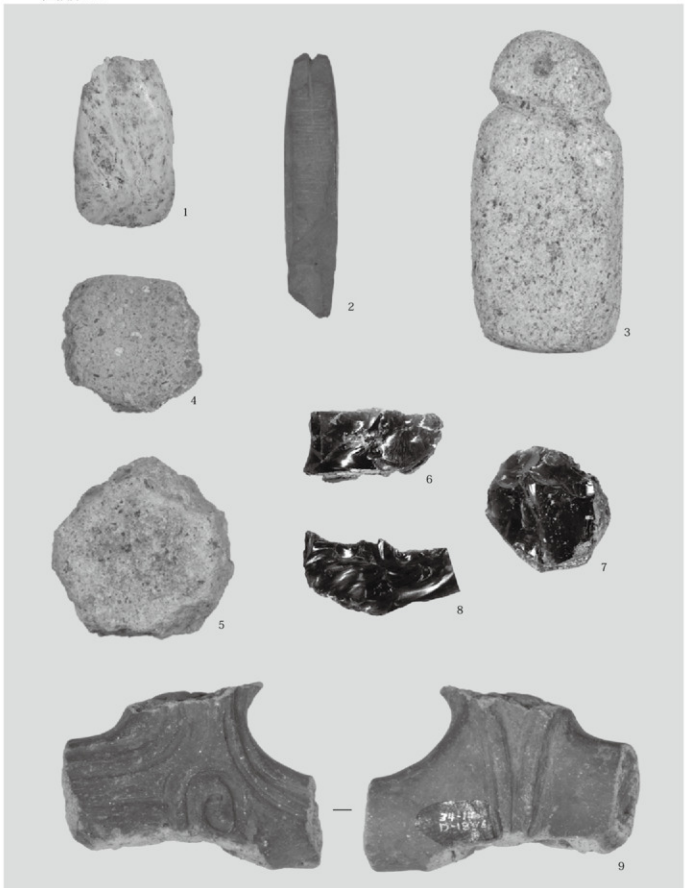
3　埋め戻し作業

1
2
3
4
5

図版 22


1
2
3
4

図版 24



報告書抄録

ふりがな	こまがたいせき
書　　名	駒形遺跡
副 書 名	平成26年度保存目的の埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	鵜飼幸雄・小林深志・塩澤恭輔・山科哲
編 集 機 関	茅野市教育委員会
所　在　地	〒391－8501　長野県茅野市塚原二丁目6番地1号　℡0266－72－2101
発行年月日	西暦2016年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こまがた 駒形	ちのし 茅野市 よねざわ 米沢 きたやまじお 北大塩	20214	34	36° 02′ 12″	138° 11′ 29″	2014.11.6 ～ 2014.12.26	108㎡	保存目的のための確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
こまがた 駒形	集落	縄　文	縄文時代 住居址　3軒 土坑　6基 焼土址　8個所 屋外埋甕1基 不明遺構9個所	縄文時代 縄文土器、石器(石鏃・石錐・磨石斧・石匙・礫器・凹石・磨石・特殊磨石・石錘)、土製品、石製品(磨製石斧・石棒)、黒曜石	・住居址3軒は前期初頭・前期後半・中期後半の1軒ずつ ・土坑の一つには土器埋設遺構を含む

要約	今回の調査から、史跡の中核をなす縄文時代中期後半の集落像を把握することができた。環状に住居域がまわり、中央は住居址の無い広場のある環状集落の様相が確認できた。

駒形遺跡

―平成26年度　保存目的の埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成28年3月18日　印刷
平成28年3月24日　発行

編集　茅野市教育委員会
発行　長野県茅野市塚原二丁目6番1号（0266）72－2101(代)
印刷　永明社印刷所
　　長野県茅野市塚原2丁目12番30号